

解して居る、呑氣坊は是を種に、時々妙な操を演ずる、

一休近來ちと手許不如意、と云へば、常には金が有りさうだが、何時も金氣の乏しい處、就中近頃薄く爲つて來た、勝手に小言の絶間がない、今日も今日とて下男に請求されたが、更に蓄なく、米鹽の料にも支障ふ仕末、

就ては一儲け仕て呉れん、と京都の辻々に高札を立てた、其文面に、

此度日本老和尚一休、三明六通を得て、飄箆を顛倒す、望みの方々見物可有之者也。但今月今日より始め申し候

と書て置た、元來が金儲けの仕事である、只入れては興行にならぬ、と俄に小屋を建て、舞臺を構へて置た、何が偕一休の興行主で、一休自ら演ずる、と云ふので、前景氣からが非常なもの、五里十里の先から泊り込みの見物、偕當日ともなれば、木戸は割れる様な騒ぎ、一人前が二百文宛の定め、夜の幕は落ちて、太陽の差上る頃には、既に満員客止め、入り残つた人は、木戸の前に黒山の様、

時間ともなれば一休、下腹の處へ、大きな瓢箆をブラリ／＼と下げ、兩手に撥を持つて、東から西、南から北、へと飛び巡り、跳廻り、舞臺をぐる／＼巡りした上、大音聲に、

『たんべう／＼／＼／＼』

と五六返繰返し、其ま、樂屋へ駆け込み、自分で太鼓を打ち、下男に鉦を叩かせ、ドンチャン／＼／＼やつた上、

『先様は是れて入れ替り』

と怒呼り、一同を裏口へ追出して、木戸に待つた人を入れ、又二百宛の觀覽料、僅か一日に數百兩の金儲け、たんべうとは瓢箆を顛倒した理なのだ、是を聞た一同、一休對手で喧嘩もならず、面々に抱腹絶倒、

『よくも是れ程白痴が寄つた者よ、』

と口々に笑ひどよめいて歸つたとか。一休の神通や不思議は、いつもこんなもの。



### 面白の春べや

或年一休、二三人の信徒と連れ立ち、酒肴を携へ、東山の花見と洒落込んだ、春は半、咲きも残らず、散りも初めぬ好季節、樹下を逍遙する者三々五々、或は青草の上に腰を下して、酒酌み交すもある、一休の一行も、此中に交り、酒酌み交し、駄洒落て居がた、酔ひのまわるにつれ、踊りつ唄ひつ、さんざめく、其内に肴が盡きて仕舞つた、誰やらが『肴も盡きて、酒も面白う飲めぬ』と云へば或者、

『いや面白い事がある、』と云ひつゝ、東山も震動する様な、大きな屁を垂れた、一同手を打つて大笑ひ、其時彼の男眞面目になつて、

凡そ世の中に、屁程面白いものはあるまい、何人も屁を聞て怒る者はなし、先づ此位面白いものはなし』

と放屁論をしつゝ、尙ほブウ〜と連發する、一休是を聞て、

『如何にも面白い、面白い事は昔も今も變らぬ、去れば昔の人も、よく〜面白ければこそ、謠にも面白の春べや、面白の春べや、と謠うてはないか、屁も春の屁が一番面白いものと見える』

一同は是を聞て呵々大笑、附近に居た者も又大笑。

### 一世一代の大失敗

太陽曆の十二月では、未だ極寒と云ふ程でもないが、陰曆十二月は、尤も寒い時である、其十二月の下旬、一休は東山の吉田、去る信徒の家に招かれ、歸るさに、今出川口の河原に差掛ると、裸一貫の乞食、さも寒さうにぶる〜震ひて居る、是



を見た一休、誠に可愛想な事だ、とて自分の着て居る小袖を脱いで、

『此寒空に川風に吹かれ、裸で居てはさぞ苦しからう、拙者も唯一枚の小袖であるが、衣や袈裟もあれば、是れは其方に與ふるであらう』

と彼の乞食に與へた、彼は額を地に附けて喜ぶてあらう、と思ふと何の事、一向に喜ぶ風もなく、仕方がないから、着て遣る、と云はぬばかりの顔つき、是を見た一休

『偕も汝は不思議な乞食、僅か一文二文の錢を貰うても、有難う御座ると喜ぶべきに、此寒空に着る物もなく、裸で居るを可愛想と、着て居る小袖を脱て與ふるに、其方は嬉しいとも思はぬか』

大に不足らしく詰問すれば、一休の顔をつくく〜と見て居た乞食、

『是は不思議な、和尚は私に小袖を呉れて、夫れて嬉しうは思はれませぬか』と意外の返答、有繫は一休、ハタと手を打ち、

『如何にも〜、是は拙者の誤であつた、我は此年まで、此一大事を悟らなかつた、其方がなくばいつ迄も、悟る事は出来なかつたであらう、誠に善知識、御身は唯の乞食では御座るまい、迷ひの夢は今ぞ醒めた、あゝ有難い〜』  
と掌を合せて乞食に禮拜し、偕目を開て見れば、唯小袖が残つて居るのみ、乞食の姿は見えなんだ、……此乞食は、曾て乞食となつて、聖徳太子にも逢つた、達磨に相違ないと、噂する人も多かつた。

### 赤子の酢の物

岩木ならぬ一休、一時は妻も持つた事がある、……和尚關東諸國を巡遊して、京都に歸つた後、三條邊に家貧しく暮して居る女を、寺に招いて妻とし、日夜是を寵愛して居ると、其内一人の男子を分娩した、

女程淺猿しいものはない、既に一子を生み、一休の寵愛の淺からぬに乗じ、身の過



去を忘れ、勝手な振舞が中々多く、然も自ら戒むる心など更にない、是れでは兎ても駄目、將來側に置かば、容易ならぬ事を仕出すや明である、然し離縁、と云はば彼、決して承諾せぬであらう、と或日彼女に

『酔を買つて參れ』

と命じた、女は何心なく、酔を買つて來ると、直に子供を抱き取り、頭から酔をかぶせ、太腿部へ喰ひ付き、既に肉を喰ひ取らう、とした、側に見て居た女、驚くまい事か、狂氣の態で、一休を突き退け、其子を奪つて、何地共なく逃げて仕舞つた。一休の計畫は成功したのである。

### 一休雷神と間違へらる

何處も同じ事、神社佛閣などは、建物も大きく、樹木鬱蒼して居れば、如何に三伏

の暑氣と雖も、在家よりは遙かに涼しい……て今日も在家の者五六人、大徳寺へ來つて、涼を入れて居ると、俄かに雷鳴して、車軸を流す様な驟雨、

一同一休に招ぜられて、客殿に通じ、雨止みを待つて居たが、雨は一層降り頻り、兎ても晴れ想もない、雷鳴は愈々はげしく、地球の根軸を打ち砕くかと疑はれる、

『さあ大變、今に雷鳴様が落ちますぞや』

『白痴は云ははるな、悪い事は云ひ當るさか』

『桑原々々』

色々な事を云ふて居る内、グワラ／＼ドシン、と屋鳴りがしたので、一同は氣絶する、大變な騒ぎ、然し一休の看護て皆正氣に返つたが、未だ齒の根も合はず震ひて居る、

『大の男が、氣の弱い事であるぞ』

『いや和尚様、雷鳴様と云ふ者は、話に聞たよりも、中々恐ろしいもので御座りま



す』

『はて姿を見たかな』

『見ましたとも、姿は車牛に羽の生た様で、太鼓を幾つも持つて居ります』

『いや違ふぞい、私の見たは、小灯燈の形でおました』

『否鳥の形でおます』

と勝手な事を云ふて居る、其内一人強膽な男が居て、

『皆の云やはるはそらだす、雷鳴様は六尺丈りの坊さんで、二尺斗りの、平たい太

鼓を持つて居やはります、今落ちるとやがて、勝手の方へ鳴つて行かれました』

と云ふ、一休獨腹を抱へて大笑ひ、實は大雨で客殿へも雨が洩る、是れを防がうと、

一休が盥を持つて天井に上り、足踏み外して堂と落ちた、其ま、勝手に行つたを、

雷鳴と間違たのじゃげな。

### 安くて嵩張る使ひ物

一休赤坂に滞留した頃、浄土宗の寺で、法然寺と云ふに宿泊した、住職も萬事に注

意し、丁重に扱つたので、大に喜び、歸京以後も、毎々文通だけは仕て居つた、處

が此僧一休を友達の様に思ひ、彼れ是れ云つて来る、其内に又急飛脚を以て、

『今度愚僧の旦那、格外な立身なされ候に就ては、喜びの仕ひ物を致し度く、然し

餘り金高の品を贈り候も、誠に不經濟の次第、就ては御地にて、安くて嵩張る品

物、至急御調進、御送り下され度願上候也』

とある、一休讀んで、

『憎い坊主の申し條、出家の身として、安くて嵩張る品、など怪しかる奴、一つ目

に物見せて呉れん』

と絲瓜の皮を柳行李に三個、夫れに

安くて嵩張る使ひ物



遠方の處を、態々御申し上せ候に就て、精々安直に、嵩高なる品を御送り申上げ候、御意に召し候はゞ、如何程なりとも、御申しの旨に任せ、御送り申上へく候と返事を添て、使者を歸した、彼僧も是れに懲たと見え、以來此麼注文はせなんだ。

### 人に貸せば癖がつく

大徳寺の近くに、天台の僧が住んで居つた、處が此僧一種違つた欲深坊主、借る事は好きだが貸す事は大嫌ひ、貰ふは好て呉ると來ては、日の暮れるも惜いと云ふ風常に大徳寺には、色々な物を借りに來る、或時一休、茶臼を借りに遣つたが、  
「他様へ御貸し申すと、臼に癖が付て迷惑致す、此方へ御遣はしになれば、挽て差上ませう」

と返事したので、無理に借るに及ばず、と其まゝになつて仕舞つた、間もなく此僧、大徳寺へ階子を借りに來た、時に一休、

「他人に貸すと癖が出て迷惑致す、此方へ來て上らつしやれ」と斷つた、僧も面目を失して歸り、多少心も改つたとか。

### 粥は碗に箸を渡した形

一休が軽い病氣で引籠つて居た時、常に出入する某、見舞に參り、一休の相伴で粥を食へた、處が此男妙に小理窟好、粥を食ながら、

「和尚様、元來文字は理詰め、とか申して、其形に意味のあるもの、と承つて居りますが、此粥の字は合點が參らぬ、兩側に弓を置き、中に米の字、何の意味か判りませぬ、米を水で柔に煮たのが粥、去ればシに米とか、米の扁に湯でも書くべき筈、夫れを弓の中に入れたのは、如何様な譯で御座りませう」

「去れば、此字は支那の國でも、尤も古く、神農、伏羲の頃、此粥を煮て食へたら、何れも腹心地よく毎日朝には食る様に相成つたが、未だ文字がない、尤も此頃は、

人に貸せば癖がつく、粥は碗に箸を渡した形



文字も多からず、鳥の足跡を見て、文字を作り初めた頃である、かゆの字を作らう、と種々苦心されたが、一向に思ひ浮ばぬ、依て諸卿を一堂に集め、此粥を食はせ、扱よき字はなきか、と御尋ねあつたが、誰も名案がない、時に伏羲が二本の箸を、碗の上に置いて考た、其形が面白いので、夫れを文字にうつし、斯く作り上げたのである、』

『有繫は和尚様、四千年も前の事を、見て来た様な即妙な御答へ、兎ても凡夫に及ばぬ處で御座る、』

と手を打つて大笑ひ、

『其笑ふに就て又不審が御座る、竹の下へ犬を書いて、笑ふと申すは如何なもの、是れは口扁に、開くと書くか目扁に皺むとても書くべき様心得まするが、』

『いや夫れは誤り、此字も粥と同じ時出来た、先づ聖賢を一堂に集め、笑ふと云ふ字を考へさせた、然しよい字が思ひ出さぬ、時に一疋の小犬、小さな籠を頭の上

にのせ、ちんく踊つて歩く、其姿の可笑さに、諸人手を打つて大笑ひ、夫れから、此字も出来て御座る』

『何から何迄よく御承知、恐れ入るの外は御座らぬ、』と辭し歸つた。

壁の戀、煙の戀

或人一休の頓才を聞き、如何に頓才でも、窮せぬ筈はあるまい、一つ困らして遣らうと、と一休を訪問して、

『時に和尚様、壁にも戀が御座るとやら、一つ是を歌に詠て戴きたいが如何で、』

『夫れは易い事、詠て進ませせう  
君まつちこねはやひとりねるばかり

こひをしたてのなわたちにけり



は如何かな』

『誠に結構で御座ります、恐れながら、煙の戀を一つ、詩に作つて戴きたう存じま  
すが』

『何より易い事、』

冉冉 輕烟惹恨長

六宮宴罷月昏黃

羊車不至芙蓉殿

知有佳人慢炷香

有繫の男も閉口し、其まゝ逃げ去つた。

### 世には子に増す寶なし

毎々一休の許に出入する、百姓があつた、或日突然和尚の前に来て、

『和尚様、誠に妙な事を伺ひますが、……實は御承知下さる通り、小供が九人も

御座ります、……處て又生れ相なんて……世の中は不景氣になる、手前共夫

婦は、三度の食も満足には食られませぬ譯、何とかして、小供の出來ぬ法は無い  
もので御座りませうか、』

『馬鹿を云ふな、世の中に小供が増した寶は無いぞ、』

『夫れは一人か、二人位の事、手前の様に、九人も十人も御座りましては、此世な  
がらの地獄で御座ります』

『飛んだ心得違ひを申す者だ、去らば語つて聞せ様、昔大和國叡火山の西に、白木  
の長者と云はれる、大分限があつた、三里の間は人の地面を踏まぬ、と云はれる  
位、倉はいろは番號で四十八、外倉が一から百迄、毎年の年貢米は積て山の様、  
何不足ない身であつたが、悲しい事に一人も子供がない、夫婦も大に悲しんで、  
長谷の觀音、三輪の大神と、祈らぬ神佛はなかつたが、授からぬ者は仕方がない、  
其隣に壱十と云ふ、代々の水呑百姓、此男前世の縁か、妙に子供が多い、年子、  
双子で十八人も子供がある、處が元來豊かならぬ小百姓、十八人の子供では、中

世には子に増す寶なし



中大躰な事ではない夫婦は三度の食を二度とし、腹八分目と云ふ所、五分目位も食ひ兼ねる、是を歎て、神社佛閣に起願したが、中々金は利からぬ、或年の猛夏の頃であつた、白木の長者の家では、門内は愚、道の端まで一面に麥を乾して置た、空十の夫婦は是を見て、せめて此麥が十五枚か二十枚あつたら、子供にも充分に食はせ、我等も腹一杯食はうもの、と羨んで見て居つた、折柄東の空に、一村の入道雲が現はるゝと見るや、其雲はのし／＼と擴がり初め、耳を劈く様な雷、稻妻、見る／＼大粒な雨が降り出し、終には押し流す程降る、……が、手不足で中々其麥を取り入れる事が出来ぬ、あたら麥は、雨に大半押し流され、取入れた物も、食用にならぬが多い、處が十八人の子供は、足に任せて遊び歩いて居たが、雨にも濡れず、一人残らず歸つて來た、

白木の長者は、親籍の子供を養子として、其成長を待つて居たが、無常の風は容

赦はない、夫婦共に早う世を去つた、親籍共は是れ幸と、皆で寄つて財産を分割し、建物を崩して持ち運び、跡は荒れ野と成り果てた、

が空十の方は、何れも成人するにつれ、兄弟共に勵んだ程に、二十餘年の功あつて、夫婦は友白髪迄隠居して、安樂に此世を送つたとか、

今、白木の長者の跡と云ふは、白木塚とも云ひ、箸塚とも云ふ、是れは長者を初め、一同の雇人迄、箸を一度使つては、皆此處へ捨てたのが、塚となつたと云ふ事、其外残るものもない、空十の子孫は繁昌して、今は數十軒に分れとる、是を思ふも世の中に、子に増す寶があらうか、精々體を大切に、どし／＼子供を産ますがいぞや、

親となり子となり來るも今ならず

二世も三世も盡さぬ契ぞ

かずもなき子を賣る人もありと聞く

世には子に増す寶なし



親ではなくて鬼の再来

親は過去我が身は現世子は未来

後生大事と子をば育てよ

と三首の歌を書き與へられたので、彼の男も大に喜び歸つたとか。

### 極樂の距離

大徳寺に出入の商人、後生を願ひ、常に淨土教を信仰して居る、或時一休の許に來て、

『常々承りまするは、極樂は十萬億土、とか申し升るに、和尚様は目の前にある、と仰せられます、五十里や百里の違ひは兎も角も、十萬億土と目の前は、月の世界と、鼈程の違ひどちらが、誠か、迷つて仕舞ひます、是は何れが誠で御座りませう、』

『夫れく、迷つて見れば十萬億土、悟れば即ち目の前にある』

『其悟ると云ふが判りませぬ、何の事で』

『悟るとは心に悟るであるから、口に出しては申されぬ、座禪工夫して、自ら悟らねばならぬ』

『左様で御座りますか、夫れでは一つ悟つて參りませう』

と其日は歸つた、以來毎日布團の中へ潜り込んで、一心に考へた、七日目に當る日、再び大徳寺に來て、

『和尚様、悟りました』

と喜色満面、

『何と悟つた』

『假令金はなく共、衣服は穢く共、朝夕の食事を腹一杯に食はれるのが、是れが極樂だと存じます』



一休も横手を打つて大笑ひ、

『其極樂に住むと思ひ、一生懸命商賣を働んだなら、必ず安樂に大往生が遂げられるであらう、』

と云はれて大得意、自分すつかり悟りを開いた氣。

### 目のある盲目

寺へ出入りの下男、近來此寺の和尚様を、活佛だなど申して、毎日問答に来るが、其云ふ處を聞くと、子供の様な事を云ふ、夫れを有難がつて、三拜九拜して歸る、馬鹿くしい、あれ位の事は儂でも出来る、一つ今日は問答をして、和尚様を困らせて遣らう、と柄にない考を起し、

『時に和尚様、男は生るゝより、珍寶を持つて出て、成人して落すは是れいかん、』未だ言の終らぬに、

『金玉と云へど黒さが如し、』

兩眼のあきらかな身を持ちながら

女にあへば目なしとぞなる

女房は辨才天とうつくしい

美人と云ふも皮の事なり

下男グウの音も出ず、其まゝに引さがつた。

### 白河黒谷の隣

當時白河に、輕口を以て人に知られた、一人の僧がある、此男常に一休の輕口を聞き、いつか參つて、和尚に一泡吹かせて遣らう、と心掛けて居つた、ふと名句が思ひ附いた、で、一休を訪問し、四方山の話の序に、

『何と和尚様、一句御出しなされては』



『いや客は發句、亭主脇と申せば、其方から一句御初めなされ』

『然らば致しませう、此處は何と申しますな』

『紫野』

待て居ましたと云はぬばかり、早速

『扱一句致して御座る、』

紫野丹波近』

『はて御貴殿の住所は』

『白河』

『白河黒谷隣』『そはいかゞて御座るな』

彼の僧は既に、一休を訪問する前、考へて置たのである、處が一休は全くの即座、

然も色が二色で、地名二つ入つて居る、彼の僧も驚いて、是は儂の敵でない、とそ

こゝくに逃げ歸つた。

### 住吉に轉住

或年一休住吉神社に參詣し、同社の拜殿に通夜した事がある、既に夜半と思しき頃、

八十歳斗りの老翁、一休の前に忽然と顯はれ、

『汝はいづくの者ぞ』

『都方の僧にて候』

『都方の者ならば、和歌を詠じて神前に供へられよ』

『畏まつて御座る、』

來て見ればこゝも火宅の宿なるを

何住吉と人のいふらん

と即吟した、時に老翁頭を左右に振り、

『歌の姿は特勝なれど、未だ心の足らぬ事よ、』とて



来て見ればこゝも火宅の宿なれど

心をとめて住めばすみよし

と詠み替へたまし、姿は消えて見えなつた、一休も是は必ず住吉明神の、我に教へ給ふ處であらう、と直に住吉に草庵を作り、日々に練業して居つた。

### 廓通ひの頬冠

泉州境の北の庄は、當時有名な廓であつた、現在は實に微々たるものでこそあれ、足利時代の堺は船着場として有名、諸商人の出入も頻繁、従つて豪商、富豪も軒を並べて居る、日々荷物の出入に、一攫千金を得るもあれば、朝榮夕衰の哀れな者もある、是れ皆廓として繁榮させる種、一攫千金を得た者は、巨利を博した祝として、悲境に陥つた者共は、自暴自棄の太駄羅遊び、吳越晝夜に往來する此里は、色餓鬼共の樂園ばかりか、財産均分の機關ともなる、

女郎買の切れ鞋、兎に角廓に通ふ者の常、三度の食は二度にしても、虚勢を張らねばならぬもの。

萬事が端手な廓には、なくて成らぬ侠客、吉原などにも出入したが、堺の廓にも又あつた、一人は野晒次郎とて、鬪體に薄の惣模様、確定文句の様ではあるが、細刃の刀落し差し、吹くか吹かぬか知らないが、握り太な尺八を、背筋の處へ斜に差し、一人は、曙の太郎とて、横雲に烏の惣模様、是も同じ體裁で、夜毎くの廓入り、堺の町て名を聞て、知らぬ者は一人もない、道で逢つても避けて通る、當時一休は、住吉の草庵に居住し、折々頬冠で見物に来た、

此頃廓て名高いは、地獄太夫と云ふ女、遊女てこそあれ、一流の太夫となれば威張つたもの、何千圓の金を積まうと、氣に合はぬ客は斷つて、更に相手に仕て呉れぬ、座布團、煙草盆迄禿に持たせ、茶屋揚屋でも、座布團敷かねば座に着かぬ、然し客には決して出さぬ、三度目からやつと敷かせる、と云ふ不禮な取扱ひ、夫れでも太



夫に逢つた、と云へば、大名に御目通り仕たよりは、遙か名譽に思つた位、  
 名を聞て集まる色餓鬼は、日毎夜毎に絶ゆる事はないが、盆前は誰、年内は誰、と  
 數千金を投じての買ひ詰め、他の客に逢はせない、此事を聞た野晒に曙、我こそは、  
 此太夫を手折り、手活の花に仕て呉れん、と茶屋へ申し込んだが、一年経つても、  
 二年経つても、更に逢はうと返事がない、  
 是は不思議、金に糸目はつけはせぬが、と探つて見れば、野晒曙の二人は、當時  
 男を磨く侠客とか、若し其内一人に逢へば、心ず大事を引起す、と云ふて二人に逢  
 はゞ戀の仇、血を流さずに納まるまい、  
 寧逢はぬが互の爲、と双方に返事を出さぬと知れた、斯く聞ては尙更捨て置けぬ男  
 の意氣地、如何でも逢はう、と力んで見たが暖簾に腕押し、更に答がない、  
 一思ひに戀の仇、討ち殺して遣らうとは、双方の意中であつた、頃しも春の半、中  
 の町の櫻は満開、軒に釣した行燈の、薄暗闇の人込みで、計らず二人が行き逢つた、

扱はよい敵御參んなれ、と互に行き違ふを幸ひ、足踏み附けて突き當り、

『ヤイ野晒、手前眼がないか、』

『左様云ふ手前は何者か、足を踏んで濟まねえと、両手を突て詫てうせう』

『何者かとは生意氣な、遠き者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ、美男雛形  
 今業平、傾城迷はせ地女殺し、御婆さん立往生、後家まご／＼御三勝手て焦れ死、

廣い泉州で知らぬ者ない、曙太郎を見損つたか、』

『妙に戒名の長い野郎、廣い泉州は扱置き、地廻りの儂様に、面を知られねえ素漢  
 賓、生意氣吐さず詫て行ね』

兩方で殺さう、と云ふのだから、無事に解決すべき筈がない、

『何を小癩な』

と云ふより早く、腰の尺八を抜き出して、互にガチ／＼撃ち合つた、が中々是れ位  
 て納らぬ、尺八カラリと投げ出し、細刃の奴を引き抜き、ウン、……オ、……で無



我無中、見物の彌次馬ワイく、噓し立てる、一足引いても男の恥、と双方一步も動かばこそ、ヂヤリく、鍰元で揉て居る、

黒の破れ衣に、日向嗅い頬冠、如意を腰に差して、此中へ割つて入つたは誰あらう、一休和尚であつた、

『是れ待て者共』

『やあ坊主の身として、出過ぎた留めだて、怪我せぬ内に引込み居らう』

『待つたと云ふに聞えぬか、』

と罵り様、如意を振り上げて双方の、急所をピンく叩たので、口には似合はず、持つた刀を落して仕舞ふ。

『貴様等は、野晒に曙だな、斯く云ふは住吉の一休、時折見物に来るが、毎も二人を見ぬ事はない、然し何の意趣もなく、此大道で刃物三昧、以來は急度氣を付けよ。』

『是はく、御高名は承つて居たれど、御目に掛るは今が初め、實は斯々と地獄太夫の話をした、一休聞て大笑ひ、』

『主の爲とか、親の敵ならいざ知らず、女一匹に迷ふて何の様、人には皮のあればこそ、男女の隔てあれ、美人醜婦の分ちある、が骨には何の變がある、夫れに迷ふてうかくと、あたら命を捨て様とは、馬鹿さ加減に程もある、命の安賣する奴等よな。』

と呵々大笑されたので、二人も一寸照れて来て、和尚の顔を見詰めて、更に詞はなかつた、

『元來貴様達は、前世大和國、岩倉山の麓に住んだ、白黒赤の三匹の犬、赤は女と産れ、今の地獄夫太、白黒は汝等二人、前世の縁を其まゝに、一匹の女を二人で争ふ、實に愚な事ではないか、尚ほ拙僧が草庵へ參れ、よう説き聞すであらう、』と立て二人の片袖宛を取り、



『是を双方取かはせ、以來兄弟の睦みを致せ、』

『有難い御教訓、曙に異存なくば、手前は仰せに従ひまする』

『いや手前とて何の異存があらう、仰せに従ひまする』

『然らば二人、兄弟の盃させん、是へ參れ』

と小さな料理屋へ伴れ行き、茲に二人に盃をさせ、一休も飲む口、三杯五杯と重ねる内に、既にへゞレケて來た、

『此はよい心地』

と歩行蹣跚、仲の町を歩いて來ると、夫れ太夫様が來た、と素見共、何れも其方へ飛んで行く、一休もぶら〜と來て見れば、道中姿が馬鹿にいゝ、

『コリヤ何と申す太夫か』

と充に聞たが、汚ない坊主が何を云ふか』と小走りに逃げて行く、側の男が、

『あれこそ地獄太夫よ』

『成程美しい』

と見て居る、是を知つた地獄太夫、

山居せば深山の奥に住めよかし

こゝは浮世の堺近きに

と詠みかけたので、一休

一休が身をば身程に思はねば

市も山家も同じすみかよ

と返歌した、太夫も内心驚た、其内に又

『聞きしより見てうつくしき地獄かな』

と詠み掛けると、太夫早速

生きくる人も落ちざらめやは

と句をつけた、此奴只者でない、と一休も感服した、が何を云ふても、乞食坊主



しか見えぬ姿、番頭共は、

「其様で太夫様に近寄る不禮な坊主、大門外へ洩摺り出せ、」

わい／＼騒いで居る、太夫是を聞いて、

「並々ならぬ御出家様、失禮致さは恨みますぞえ、」

鶴の一聲番頭共も頭かさ／＼、何れも引込んで仕舞つた、

「貴坊さまはえ」

「拙僧は住吉に住む、一休と申す貧僧」

「扱は兼々承つた活佛様、よう御越し下されました、先づ御一緒に」

「扱は拙僧をも地獄へ墮すかな」

「オホ、墮さいて置さませうか」

「是は面白い、去らば參らう」

太夫は一休を慰め様と、數人の藝者を招き、幫間を呼び、精進料理で御馳走した、

が

「拙僧は小供の頃から、鯉が大好物、此處で精進は面白くない、鯉を持つて參れ、」

是れより山海の珍味に舌鼓打つて、飲む程に食ふ程に、十二分に酩酊、面白くて堪

らぬ、例の破れ扇を取出して、ヤツコラサ、と坊主頭へ鉢巻、大肌脱ぎで踊り出し

た、地獄太夫も肝をつぶし、禿を呼んで、

「一休様は活佛と、兼々人の噂に聞たが、今夜の人の様子、魚肉を食ふのみか、あ

の始末、事によつたら賣僧奴が、一休と偽名して來たも知れぬ、よう氣をつけて

見てたもや、」

と云ひ置き、自分も隣室から、其有様を覗て仰天、並み居る藝者幫間は、皆骸骨に

見え、一休獨面白想到に踊つて居る、是は目の加減ではないか、とよく／＼見るが矢

張違ひがな、

「扱は誠の一休様に相違ない」



と是れから一層懇ろに取扱つた、一休も飲んで踊り、飲ては踊り、酔の廻るにつれて、勞れも出たか、其まゝ倒れて高鼻、  
二三人の女共、倒れたのを室へ抱き込み、布團を掛ければ一眠り、翌朝迄寝て仕舞ひ、曉近く目を醒し、

「ハテ面妖な、ヒヨンな處に寝て居るわい」

「御目醒て御座りますか」

「ヤア地獄、拙僧の庵室より、奇麗だと思ふたら、其方の室か、ハ……ア、イカ

イ世話になつたぞ、」

「其様に御急ぎなさらずと、御茶一服」

「夫れは結構、……ハテ扱其方の皮は美しい、色餓鬼の迷ふも無理はない喃、」

「皮が美しいとはえ」

「顔と云ひ肌と云ひ、其皮が美しい、と申すのじや」

皮にこそ男女のへだてあれ

骨には異なる人がたもなし

骨を包んだ皮だけが、誠美しう見ゆるわい」

「貴僧様にも、美しう見えますかえ」

と一休の膝に寄り懸つて來た、

「見ゆる共、だが腸の臭ひは悪なものよな」

「腸が臭ふとは、妙な御詞、」

「大俗共は其臭が、嬉しいと申すとか、身共は非常好かぬぞや」

「一休様とて、木の股、石の中から生れ被成た事でもあるまい、何て其様に御嫌ひ

なさる」

「犬だぞ、大和の犬だぞ」

「なんとえな」



「其方は大和の赤犬、野晒、曙は白黒犬、前世の業因て、今の世も、二人て一人の女を争ふ、……ても業の深い女てはある」

「業と云へば妾程、世に哀れな者が御座りませうか、母には縁薄く、父の爲とて十  
二の春、此色里に身を賣られ、朝夕變る枕の數、人を迷はせたも數知れず、せめて罪の輕うなれと、懺悔の爲に地獄の模様、……八重桐と呼ぶ人はなく、皆地獄太夫と呼ばれます、地獄と知りつゝ、尙ほ止まず、日毎に通ふ人もある、唯さへ女は五障三從、其深い罪に此罪を、合せましたら後の世は、如何なるかと案じられ、人には云はね自らは、朝夕守りの觀音様に、御太助なされ、と合掌致さぬ時もない、……生れまじきは女子の身て御座りませうな」

「迷へば遠い地獄極樂、皆目の前にある事、誠に後世が太助りたくば、觀音様を頼まうより、身を慎むに過ぎたはなし」

「身を慎めとはえ、」

「口と行ひを一つにし、妄語せぬが肝心ぞや」

「有難う存じます」

「又來る程に待つて居や、ヤレ〜面白い事であるわら」

### 堅田の釣魚

曾て一休堅田の浦に住んだ時、毎日海濱に出て魚を釣り、是を肴に一献參ると云ふ寸法、更に俗人と異なる所がない、時に弟子の僧、斯くては遂に師の名譽にも關はる大  
事と、和尚を一室に訪ひ、種々諫言に及んだ、が吞氣な一休、

「各自は學問をするとして、何事をするか、我は古の祖師の眞似をするのだ、祖師の眞似は即ち禪宗の學問、我は決して無益の事はせぬ、汝等知らずとならば、いて古の繪を書いて見せう、」

とて蜺子和尙の海老を釣れる圖を書き、其上に一首



いにしへの賢き祖師は海老を釣り

我はあほうで魚つりて喰ふ

と大書して見せた、諫言した僧達も、其頓才に驚た、が其内に一人の老僧、

「祖師の海老釣れるとて、貴僧の如き若輩が、魚を釣るは、鶉の真似する鳥と申すもの、元來和尚は、蜆子和尚の海老釣れる心根を御存知あるか」

と罵倒したが、一休は平氣なもので、

「扱々貴僧は愚な心ではある、蜆子の海老を食つた心は、一寸會得は出來まい、然し道は老若には依らぬ、若し老たるが悟道を得ると云ふなら、門の犬も悟を得様、釋迦は三十成道と承る、又波若達羅尊者が、王家に美玉を持つて行き、三人の王子に示して、『此玉を寶と爲し玉ふべきか』と云ふた時、二人の兄は共に此玉に勝る寶はあるまい、と云ふたが、一番弟の王子は、僅か七歳であつたが、此玉を見て、此玉世寶の如くであるが、然も寶とすべきでない、知光の玉こそ誠の寶で

ある、と云ふて其玉を地に投じて仕舞つた、尊者是を見て、斯く幼いに似ず、名利を捨てた振舞と大に感心し、即ち達磨と名をつけた、是れ祖師達磨である、去れば悟道は老若には依るまい、』とて手を拍て笑つた、

老僧は多くの人の面前で、斯く嘲笑されたので、一層悔しくて爲らぬ、

「然らば和尚は蜆子の海老を食つた心を御存知か、元來禪は以心傳心の法であれば、蜆子でなくては蜆子の心は判らぬ、然るに御坊などが、蜆子の心を知つとるなどとは、實に片腹痛い事であるわい、』

と罵り返した、他の僧共も、此老僧に味方して、共に一休を嘲笑したが、一休は平氣、

「扱も無益な事を申すものかな、各々が一休にならずば、一休が蜆子を知れるか否かは判るまい、夫れを知らずして、一休を笑ふこそ、誠に愚の至りだわい』と横手を打て笑はれたので、一同も面目なくそこへ逃げ出した。



彌五郎俵の引導

堅田の浦に彌五郎と云ふ獵師があつた、元來が獵師と云ふ、殺生を業として世を渡る人間、後生大切と願ふ様では、兎ても稼業の出来る筈がない、此男も生れ附ての信心嫌ひ、釋迦堂の前を野雪隠と心得、地藏の顔には、小便垂れ懸けて、鼻唄で通る不精物、珠數とは聞た様な貝の名や、薬師とは杓子に似た魚か、眞逆に下駄の鼻緒じやあんめい、時々聞くが、と高笑ひ、

斯麼手合に佛法も説法もあつたものか、然し生とる人間だけに、死ぬ事だけは忘れず、假初の風が病の元、終に此世を引取つた、妻子となれば別なもの、後世安樂に往生させたいと、親類寄つての長會議、高僧智識も呼びたいが、其日暮しの瘦世帯、夫れも叶はず如何せんと、思案に餘つて門に出て、

若し彌五さんが壯健で居たら、曳聲出して漕ぐ舟は、魚の小山を移て來る筈、何

時も今頃着く筈と、

眺める處へ來かゝる一休、

「是へ御座つた御出家様、兼々御名は聞たれど、死人を持たぬ我身には、一休様も用ない、思ふて居たが今日の今、折入つて御頼み申したい、妾の夫彌五郎は、罪の深い商賣、今日今の先死に居りました、金の力で頼んでも、聞て下さらぬ御坊様、只で頼むは厚顔しい、なれど御慈悲の深いと聞く、妾が願聞き入れて、何卒夫の後の世を御助けなされて下さりませ、」

と衣の裾へつかまつて、更に動く様もない、

「よし／＼引導渡して遣る程に、死骸を俵に入れて參れ、」

「其俵とは」

「米俵の明たのに、頭と手だけは出して、くる／＼包んで繩をかけ、解けぬ様に仕て參れ、」



「畏まりました」

と俵で包み、繩をかけて持て来ると、

「其方共は小舟に乗て沖へ出る、身共の舟に死骸を積み、」

と其まゝ沖に漕ぎ出して、直に死骸を海の中へ投げ込み、一聲張上げて、

「此俵は是元來米俵にもあらず、豆俵にもあらず、汝は堅田の彌五郎俵なり、恒

河に沈んで魚類の餌となり、佛果を得よ、喝。

彌五郎も此引導に成佛出来、其夜妻の夢中に來て、厚く禮を述べ、紫雲に乗じ、西を指して行つたげな。

### 釋迦や達磨の故郷に禮拜

先づ何が氣樂と云ふて、一休位の吞氣な、且つ恍惚た男は、古今を通じて多くはあ  
るまい、他から見た時は、確かに狂人としか、判断のつかぬ様な事を、敢てして恥

る處がない處か、尤も平氣で、眞面目で行つて居る、こゝに云はんとする處も又其  
一つである、

一休或田舎に行き、川邊を通つた、頃しも猛夏の夕暮時、一人の婦人が、赤裸々て  
川の中に入り、行水を使ふて居る、折柄一休此側に架した、橋の上を通り、彼女の  
陰部を見るや、直に橋の上に膝を突き、御丁寧にも笠を取つて、三拜九拜し、拍手  
を打つて行き過ぎた、此有様を、附近の畑に見て居つた農夫等は、

「是は面白い、狂氣坊主が通るぞ、一つ黠つてやらうてはないか」

と一人が云へば、夫れは面白い、行けくと、皆一同に一休の後を追つて來て、

「尙和く、女の皮膚を見、陰部を拜めば、何程の御利益が御座るか、後學の爲め、  
ちと承りたい、夫れ共佛道の修行には、是非致さねばならぬ事で御座るか、若  
し佛道修行にあるなら、坊主は中々面白いもの、我等も只今から鎌を捨て、和尙  
の御弟子に仕て頂きたい、如何なもので御座らう」



と口々にわい／＼囉し立てる、大笑する、が一休は濟したものの、  
女をば法のみくらと云ふぞ實に

釋迦も達磨もひよくと生る

と詠じ、

『釋迦達磨、孔子孟子も皆是れから出て、世を教へ人を濟ふたではないか、去れば  
聖人賢者も、愚者痴者も、皆生れ出た古郷、參拜するが當然な事、是を輕視する  
は、己が故郷を恥しむる者であらう』

と云ふたまゝ、サツサと行つて仕舞つた、残つた連中按に相違して、何でもあれば、  
只の坊主ではない、必ず一休様でがなあらう、と一同大に感心したとか。

### ちんちくりんの戀煩

江州竹林寺の住僧は、一休とは懇親の間柄、處が此坊さん、身の丈は三尺有餘、

普通の人に二尺も足らぬ、が矢張人間である以上、戀の味は知つて居る、

自分の寺の側に、美少年の何某、と云ふ者がある、和尚此子を手馴附て、常に寺へ  
遊びに来るを、何よりの楽しみに仕て居つた、處が如何なる理か、近來一向に姿を  
見せぬ、和尚心配で堪らぬ、否淋しくて仕方がない、是が病因となつて、一室に閉  
居し人にも面會せず、下男や小僧に當り散らす、今日も下男が少しの過失があつた  
とて、烈火の如く憤り、枕を取て投げ附け、罵詈雑言して居る處へ、一休が遣つて来て、  
『何で其様に御立腹なさるか、勘忍なされよ』

と云はれて、和尚一寸赤面く、餘事に紛らして仕舞つた、が顔色の唯ならぬを見て、  
『何ぞ御心配でも御座るか』

と問へば、竹林和尚、聊か恥入つた風で、實は是れ／＼と、美少年の事を語つた、  
『戀煩ひとは、近頃浮氣な沙汰で御座るな、併し有情の身なれば夫れも宜からう、  
夫れでは菜と錢と米糠を少しづつ、紙に包んで遣はしなされさすれば必ず參るであ



らう』

『ハテ菜と米糠と錢、……是れて參るとは合點の行かぬ』

『夫れはナゼニコヌカ、と云ふ義であるわい』

『ハ、ア是れは妙、然し今日は雨も降れば、明日遣はしましやう、何となう心淋しい折柄、坂本より到來の美酒も御座れば、一献召し上りませ』

爰に一休と竹林和尚とは、酌みつ唄ひつ、いゝ機嫌になつて來た、そこで一休例の破れ扇で拍子を取りながら、

君が來ぬとて枕が知るか、枕な投げそ咎はなし、ちくりん／＼ちんちくりん、さなちくりんじや程に、氣の損よな、踊はなんよさ、ちやせんちやツこらさ。

て踊り出し、暗に坊さんの、ちんちくりな事を諷刺したので、和尚も自ら省る處あり、以來此戀を斷念したと云ふ。

戀しき君の御許へ

京都にゆるりや藤太夫、と云ふ吳服屋があつた、此男元來出雲の國の者で、暫く京都に住み又都合で歸國する事となつた、處が其妻は、當時他に密夫があつて、歸國するは不利だ、と大に夫に反對したが、是非に及ばぬ場合、

密夫にも泣きの涙で別れを告げ、何れ相當の金さへ手に入らば、再び京で逢ましよ、と互に誓約して分れ去つた、分れて後は強増しに、密夫の事が按じられ、一日も安閑として居られぬ、然し夫ある身の思ふに任せぬ事ばかり、切なる思ひを筆に云はせて、絶えず密夫の許に飛脚を立て、其返事を待ち受けて、自ら慰めて居つた、隠すより現はるゝはなし、で誰知るまじと思つて居ると、既に附近の誰彼の口の端に上り、遂には親族にも聞ゆる仕末、

町内で知らぬは亭主ばかりなり、とは宜う云ふたもの、既に公然の秘密となつて居



るが、藤太夫更に知らず、出雲の神の御膝元、其本場所て結んだ縁、何て邪魔する者があらう、

と萬事は妻に任せ、日々の行商併し親戚でも只見ては居られず、藤太夫に語れば、『お節に限つて其廢事のある筈がない、夫れは誰か夫婦の中へ、水を注すに相違な』

と更に信ぜぬ、近傍の人も是を聞いて口あんぐり、あれでなうては、密夫は持てぬ、と笑はれるのみ、お節は安心して、密夫との音信は益々繁くなる、

知れまいとすれど、度重なつては顯はれずには居ぬ、自分の不在に届いた手紙、藤太夫が受取つて、扱讀まうとしたが、悲しい哉彼は無筆、帳簿さへ妻に付けさす男、假名文字の擲書きなど、尙更讀める筈がない、……と云ふて人に見すべき品でない、兎やせん、角やと考たが、頼むべき人もない、折柄一休が行脚して、隣町に泊つて居ると聞き、是れ幸と、一休を尋ね來て、

『和尚様には、宜う御下り被爲ました、暫く御不沙汰致しまして』

『いや藤太夫殿、一別以來暫く逢はなんだ、別に御變りもないかな』

『誠に有難う存じます、處が其少し變りがあるので、一寸御伺ひ致しました』

『ハテ御内儀でも亡りましたか』

『夫れく、夫れがなくなりかゝつて居りましてな』

『御重病かな』

『へい病氣ではなうて、虫が付きました』

『虫が付たら取ればよいに』

『其事で御座ります、一寸御覽を願ひたいので』

と差出したのは例の艶文、一休も驚いた、兎ても普通人では、口に出す事も出来ぬ迄、露骨に、言語道斷な事が長々と書てある、然し騒がぬ一休、

『ア、是れかな、宜しい、何、拜啓陳は其後は、御不音に打ち過ぎ申譯無之候、



お前様を初め、藤太夫殿にも御壯健に、御商賣御繁昌の御事と、影ながら喜び居り候、何だ是れは時候見舞の手紙だよ」

「へえ左様で御座りますか、いや左様あらう、お節に限つて、不義をする様な女じゃない」

「何、内儀が不義を致したと申すか」

「左様に人が申しまする處へ、お節宛の手紙が参りましたので、一寸妙に考へましたわけ」

「夫れは悪い了簡だ、其方の字を書かぬを知つて居るから、内儀に宛て送つたのであろうぞ」

「如何にも左様で御座りませう、有難う存じます」

と歸つて、直に其次第を妻に話した、妻は是を聞いて、一休の厚い情に感謝し、此御心よしの夫を捨ては、誠に申譯ない、と自ら悔る様になり、以來密夫との音信を絶

ち、夫太切と盡したとか、是れも一休の頓才に依てゝある。

### 黄金の幽霊

一休壯年の頃、山城地方を巡遊して、瀧木と云ふ村に來た、此處に一つの古寺がある、何十年來、住職もなければ、寺は愈々荒廢して、軒も傾き壁は落ち、目も當てられぬ有様である、

で、里人も相談して、古代より有名な此酬恩庵を、狐狸の栖とするは忍びない、相當な人を撰で、住職に仕様と、一決して誰れ彼れと、望み次第に住職とするが、其夜の内に死亡し、又は行衛不明となり、誰住み果つる者もない、

一休此事を聞き、夫れは面白い、自分が住職にならう、と村長に申し入れると、  
「夫れは誠に結構で御座れど、何れも死亡し、行衛不明となり、三日と住んだ者はない、命が危い、御中止なされたがよろ」



『いや身共は考ふる處がある、怪物何の事あらん、必ず退治致して呉れる』  
『然らば御意のまゝに遊ばせ』

『夫れは忝ない』

と此古寺に移つた、幽かな燈火は、古び切つた荒寺の天井に、朧り寫つて、壁の割れ間からは、二十日の月が斜に、淡い光を差し込んで居る、五尺に餘る庭の草、ソヨ／＼と葉摺れの音に、虫の鳴き聲が交るのみ、外には何の音もない、如何にも物凄く有様に、一休も手を拱き、思案して居ると、早子の刻と思しき頃、十六七の少女、一休の側へ歩み寄る、

『御座つたな』

と心に首肯、

『大概は推量致して居る、マゴ／＼せずと早歸れ』

と怒號一聲、怪美人の姿は消えて仕舞つた、間もなく十五六の美少年、銚子に土器

を持つて出て、一休を見て微笑を含みつゝ、

『御酒一献召し上れ』

『又參つたか、早歸れ』

と一喝されて是も消え失せた、間もなく大風吹き起り、堂は左右に震動して、今にも崩れ倒るか、と思はれた、同時にゴ／＼と雷鳴、稻妻頻りに起つて、家の隅迄見ゆる様、折柄身の丈六尺に近き法師、忽然と顯はれ來り、一休を見て泣くが如く、笑ふが如くである、見れば顔色蒼然、併し眼光稻妻の如く、兩眦に朱を注ぎ、頻りに佛壇の下を覗き込み、恨めしげに一休の方を見遣つて居る、時に一休、

『三度迄來るとは言語道斷、早々地下へ歸れ』

と大喝すれば、彼の怪物は消え失せた、間もなく此夜も明けたので、村の者は大勢一團となり、一休も可愛想に、化物に殺された事であらう、早う行つて見舞ひませう、と寺の附近迄來たが、扱一人進み入る者もない、



「一休様」

「御坊よ」

と呼んで居る、時に一休門前に立ち出て、

「是はく村の衆、よう參られた、先づ是へ」

「待てく一休かい、足があるか、よう見ときや、」

「ハ、ア一休に相違御座らぬ、安心して參られよ」

と一同を本堂に導き、

「何でも佛壇の下に理由がある、此寺を破却し、佛壇の下を深さ三尺、廣さ六尺堀

て見たい」

と云ふたが、此寺は村の草創、古い因縁もあれば、破却する事ならぬとは、衆人の

云ふ處であつた、

「其様に大切に思はるゝなら、此寺を數倍に新築して進ぜる、安心して取拂はつし

やれ」

新築して呉れるなら、夫れこそ結構、と村民惣出て打ち壊し、扱佛壇の下を堀つて

見たら、大きな瓶が三箇出た、其内部は悉く黄金、驚いたのは村の者共、

此事早速領主、近衛殿へ申し上げ、一つの瓶を近衛家へ、一つは村の衆へ、残る一

つて寺塔を新築した處、前に數倍の寺院が出来た、

一休大徳寺の住職となつて後、此寺を大徳寺の末寺とし、尙ほ隱居所を建設し、大

徳寺代々の僧も、此寺を隱居所と致したとか。

訴狀に狂歌

一休和尚、奈良の瀧木村の破れ寺の住職となる以前も、此附近へは、時々遊行せ

られた、由來此村は、近衛關白の所領地、同家の老臣、左近尉何某と云へるは、性

非常な強慾者で、常に主の名に依て、農民より多くの財を貪る爲に士民は窮困其極



に達し、度々訴状を呈しても、毎々左近尉に握り潰され、反て犬糞的に多くの課金を申し附ける、

今日もくとして、又課金の命に接し、村民集合の上、如何すべきか、と善後策を議したが、扱名按も出て来ない、折柄一休托鉢に来たと聞き、一鉢の白米を施し、

「扱和尚は大學者の由承り及ぶ、人を助くるは御出家の役、是非我等の困難を救ひ給はれ」と申し入れた。

時に一休、

「野僧は各々の施物で、其日を送る貧僧であれば、兎ても米錢を以て相談は出来ぬ、然し他に手段あらば、應じて遣はさう」と答た、村民一同、

「いや決して米錢を給れ、とは申さぬ、何卒近衛殿へ差出べき、訴状を一筆願たい、」

「今日迄訴状を何度出しても、更に御上に達せぬとか申す、就ては一首の狂歌を與

ふるであらう、是を差上げて見よ、」

とて其まゝ歸つた、村民の内にも説區々に分れ、度々に及ぶ訴状さへ、關白の御許に達せぬに、此様な狂歌が何と御前に披露なるものか、と云ふ者も多かつたが、元來和尚は凡人でない、其人のせよと云ふ事をせぬは、道を聞て故ら他の間道へ踏入様なもの、是は一度奉るがよからう、と古老の説。

扱日を期して此歌を持ち、近衛殿へ遣つて来て、

「御領内の民、狂歌を御前に奉りたい、」と申し入れたので、直に庭に廻され、直接關白に奉つた、關白見ると驚た。

世の中は月に村雲花に風

近衛殿には老近くなりけり

とある、元來此歌は、何物が書た、と關白大に立腹の躰、村民恐るゝ  
「一休和尚に候」と申す、



『成程一休でなくは今の世に、此様な不禮を申す奴はあるまい。』  
と笑はれたがり、更に咎もなく、以來課金年貢も軽くなり、村民一同一休の徳を賞讃せぬはなかつた。

### 小便で開眼供養

關の地藏造立の時、村人集會し、如何なる僧を招て、此開眼供養を頼むべきか、に就て僉議に及んだ、時に一人の老人、

『我此程都へ上つた時、京童の申すには、今の世に、一休和尚程高德な人はないと聞き及んだ、就ては紫野の一休を招いては如何、』

と申し出た、何れも土地繁昌の爲め、左様な高德な人を招くに如はない、と一決し、早速紫野へ使者を立て、依頼すると、

『野僧今回關東下向の志あり、近々發足するから、其序に開眼供養致して遣さう』

と約束し、里人は歸つた、扱名にし負ふ一休様の御下り、不都合の無い様と、道を清め、式場を飾り、當日を待つた、

愈々當日となるや、村人等は葬禮、婚禮、御能拜見以外に着るものでない、と云はる、紋附の羽織に袴で御出迎ひ申す例に依て例の如き一休、黒の破れ衣に三度笠、獨てくく乗込んで來た、

『扱開眼の地藏は何所に居る』

『是に御座ります』

『それく一寸開眼致して遣らう、』

と云ふまゝに衣を掲げて、雷門の瀧の様な大小便を、ジャクと地藏に放被た、のみか前に山の如く飾られた百味の飲食、香花も小便だらけ、

『まづ開眼は濟んだ、關東へ下向致すであらう』

と其まゝ行つて仕舞ふ、村民一同怒るまい事か、火の様になつて、



『折角作り上げた地藏尊へ、わざ／＼都から狂人坊主を招て小便させたであつては他村の聞えも穩かならぬ、いで各自追掛けて、坊主を搦め捕て參らう』

後鉢巻、繩襷、チン／＼端折て竹鎗おつ取り、繼け若者と奮直に一休の後を追つかけたが、初めの勇氣何所へやら、途中へ來ると各自に、眩暈、足竦縮んで、走る事が出来ぬ、己れ／＼と齒齧をしたが少しも歩けぬ、一方村の小寺に住む尼、

『やれ／＼勿體ない、狂人坊主に小便掛けられ、嘸御無念に御座りませう』と生た人にも云ふ様に、地藏の前に額づき、清水を汲て地藏を洗ひ、供物香花も改め、六道能化地藏尊、一心敬禮地藏尊と、拜んで居る内に不思議や此者、狂はしくなつて、

天下の老和尚一休の開眼なされたを、何とて洗ひ落したぞ』

と口走る、其外怒つた村人の、妻子眷屬一同も、皆狂人の様な有様になつて仕舞つた、

扱は一休様の被爲方を悪しと思つたが心得違ひ、何とか地藏様へ御佗を申さねば、と早速一休の後を追はせ、桑名の渡し場でやつと行き逢ひ、右の由申すと、

『夫れは不便な事じゃ、然し身共が歸るにも及ばぬ、是を持って參れ、そして地藏の首へ巻附けて置け』

とて、五六年も洗はず、布目も見えぬ古贖鼻禪を外して、村の者に渡して、此古汚ない古禪かとは思つたが、前の事もあるので、仰せ御尤もに持て歸り、地藏の首に巻き附けると、不思議に狂人共が全快した、

兎に角有難い古贖鼻禪と、其まゝ地藏の首に巻くと、關東の歸途、一休が通りかゝり、其古ふんを外して、堂の前に掛けた、鉦の緒にして行つた、是以來神佛の前に掛けた鐘の緒は、此古ふんの長さ、即ち六尺に切る事となつた、とは虚か誠か、



### 一休山伏と法力競べ

一休或時堺へ下る時、淀川の乗合舟に、山伏と乗り合せた事がある、時に山伏、  
『御僧は何宗で御座る、』

『私は禪宗』

『禪は愚民の信ずる處なれど、我等の如く奇特なる法力はない、笑止千萬な事御座るな、』

『いや禪にも法力は有るが、其方の法力を拜見仕様』

『然らば某此舟の舳先へ不動明王、兩童子の三尊を祈り出して見せう』

とて、大聖護王不動尊と、鹽辛聲を振り絞つて、一心に念ずるや、不思議にも、舟の舳先へ忽然と不動の像が現れた、山伏は大得意、

『何と皆の衆、拜みめさつたか』

乗合一同は、誠に有難いと一心に拜んで居る、一休は大に笑つて、

『去れば身共は、身から水を出して、此不動の火焰を消して見せる、消されぬ様に一心に祈つて御座れ』

と云ふまゝに、舳先へ立出て、慮山の瀧の如く、チャ／＼と小便を垂れ掛けたので、不動の形は忽ちに消えて仕舞ふ、今迄拜んで居た乗合の者共も、皆興を醒して呆れて居た、

間もなく舟は陸に着く、と山伏先の腹癪を仕様と、

『何と御坊、あの犬が喚くを止め、こゝへ呼び寄せて見せうか』

『如何にも是は一段と面白い、さゝ祈つて見やれ』

山伏は赤木の珠數の顆高を押し揉みく、

『東方に降三世明王、中央大聖不動明王、西方軍荼利夜叉明王、彼の猛犬の喉を十文字に封じて、聲を止めさせ給へ』



と額に疝氣筋を出して祈つたが、犬は一層吠ゆるのみである、時に一休、  
『身共が一つ止めて見せう』

と懷中から、中食の握飯を取出して、犬の方へ見せ、こい／＼と振つたから堪らぬ、  
流石の猛犬も尾を巻いて一休の足許へ駈けて來た、重なる失敗に山伏は、物も言はず  
に行つて仕舞ふ、見物の老若、世の中は禪に限る、と一休を拜禮したさうな、

### たつた一曲七日の興行

一休甲斐の國に下り、暫く逗留して居つた時、一人の瘦浪人、一休を訪ねて來た、  
『曾てより和尚様は、生佛との御噂、拙者は浪々の身となり、知らぬ他國で誠に困  
難致す、死人病人を助くるばかりが佛の慈悲でも御座るまい、四百餘病の外に貧  
の病も、何とか御慈悲を以て、御助け下されます様、願上げます』  
と涙を流しての依頼、何でも安請合が一休の特色、

『いや宜しい、何とか致して進ませう、處で貴殿は、親類とか、縁者に相當の者  
は御座らぬか』

『親類には、中々の大身、今歴々に暮し居る者も御座るが、少し不都合あつて、一  
寸參り兼ね申す、夫れに遠國で御座れば、尋ねて參る路銀にも困却仕る次第』

『夫れは誠に困つた次第、然らば何か藝能はないかな』

『生れ附ての不器用者、更に藝能は御座りませぬ』

『然し武士の法として、禮樂射御書數と、此六法を知らねばならぬ、其内何なりと、  
貴殿の得意とする所を申して見られよ、』

『誠に御恥しい事ながら、夫れが一つも出來ませぬ、』

『夫れでは浪人して困難するも理の當然、併し氣の毒な事だが、種のない手品は出  
來ぬ、拙僧も乞食同様、更に一文の蓄もなし、誠に困つた事ではあるわい』

『和尚様、斯申し上げるは誠に變て御座るが、敦盛の舞一曲だけは、子供の時に習



ひまして、只今でも一寸く舞ひますので、此一曲丈は、自分ながら巧いと存じます、

『夫れく、夫れて初めて手品が出来、萬事は一休が計らふから、まあ拙僧から沙汰する迄待つて御座れ、』

『誠に有難う存じます、何分共に宜しく』

と歸つて行く、後に一休は宿の亭主を招き、萬事を申し付け、扱何でも廣告に限る、と直に各町村の辻々へ高札を立て、

一 此度上方より幸若罷下り、觀進能仕る、

觀進元は日本老和尚一休

と書て置た、さあ評判は大變なもの、一休様の觀進で、幸若が来る、此廢事は一生の内に又とあるまい、夫れあつちの親類へも使を出せ、此所の知人に飛者を遣れ、と同地附近では大評判、十里も十五里も先から、泊りがけて見物に来る、附近には

俄宿館が出来、夫れても狭くて、疊一疊に三人宛も押し込まれ、恩に被て泊て貰ふと云ふ有様、

愈々當日となるや、野中に作つた大きな小屋には、夜の明け方から、どしどしと押し込んで来る、太陽の上つた頃には満員客止め、客の方から、三拜九拜しても入れて呉れぬ、既に小屋は割れる様な騒ぎ、

浪人先生、今日を晴れと着飾つて、樂屋から練出して来る、數萬の見物人は、夫れ出た、とばかり鳴を静め、足を爪立て、見て居る、

浪人は自分で謡ひつゝ舞つて居る、曲も進んで『同じ蓮の蓮生法師、敵にてはなかりけり、跡吊ひて給ひ給へ。く。』と謡ひ終つて、扱樂屋へ引込むと、樂屋に居る男が出て、

『扱四方の御客様方、遠路態々の御入來、樂屋一同有難く御禮申上げます、就さましては、皆々様方の御好みに應じ、何なりと舞はせませすれば、何卒御好みの處を



御申し聞け下され度く、偏に願ひ上げまする』  
さあ群衆は大騒ぎ、

『いや大職冠が所望じや』

『馬鹿をいへ、悪七兵衛を願ひましよ』

『夫れより目出たい高砂が宜しい』

と勝手な事を注文する、其内隈に居た不頼漢共、一時に大肌脱ぎになつて、群衆の中へ割り込み、

『生意氣を云ふな、悪七兵衛や高砂が何て面白い、今の敦盛に及ぶものはねえ、彼れ是れ云ふと小屋を押し潰し、皆殺しに仕て遣るぞ』

と大變な騒動、此不頼共に恐れをなして、誰一人、何とも云ふ者が無い、處て前の男、

『然らば御注文に従ひ、敦盛を舞はせまする』

と又敦盛が初まつた、終ると男が出て又注文を聞く、例の悪漢等、いつも敦盛ばかり所望する、五六曲繰返して、

『今日は是れて千秋樂、又明日は面白い處を差替へ、御高覽に供します、』  
見物の大勢、敦盛の舞も面白いが、一日中同じものばかり見せられては、ちつとも可笑しくねえ、明日は悪頼者も来まいから、一つ面白い所を所望仕様、

と、面々に宿へ歸つて行く、扱来て見ると前日と更に變らず、夜の明けぬ内からの大入、然し曲は又敦盛の一曲、

明日はくと七日の期限迄の大入客止め、然し七日共敦盛の外一曲も變つたのはない、夫れも其筈、太夫様が此一曲より外は知らないのである、……其内胃を見

せまいと、一休の斗らひとして、此不頼漢を雇つて置き、扱注文はと云へば、いつも敦盛を所望させたのである、見物人こそいゝ面の皮、十里も十五里も出て来てたつた一曲、



併し毎日の大入で、收入は豫算以外にあつた、彼の浪人も是れて再び芽を發き、大枚の金を懷中に、國表へ歸る事が出来た、

一方、此事が町役人の耳に入り、一騷動持ち上る所であつたが、何を云ふても對手は一休、手の附け様もなく、其まゝ役人の泣き寢り。

### 吹て通る東海道

一休曾て關東へ下つた時、元來の呑氣坊、道中面倒な事と更に供人も連れず、普化僧の姿と化し、一人瓢然と旅の人となつた、途中一休を見知れる山伏、此體を見て、素知らぬ風で、

『如何に普化僧、何れより何れに行くか』

と問ひ掛けた、一休直に、

『素より普化僧の身、行方定めぬ旅で御座れば、其日く風の風に任せて、何れへな

りとも參るで御座る』

『風に任せて參るはよし、若し風なき時は何と召さる』

『されば自ら吹て參る、』

と腰に差した尺八を取出し、道化の一曲を吹奏しつゝ、平然と去つた、山伏は後に只呆然。

### 猿の報恩

一休伊豆國へ下り、田舎道を心任せに、獨ブラく歩いて行くと、道の側で、キイ／＼と云ふ哀れな泣き聲、何事かと寄つて見れば一人の男、猿を柱に縛り付け、無慘にも今や打ち殺さん、とする處であつた、

一休哀れに思ひ、懷中から若干の金を出し、此猿を貰ひ受け様としたが、元來無慘な彼は、中々應ずる色もない、



「何だ坊様、皮だけ賣つても二分にはなる、一朱や二朱の目腐れ金、己あいらねえよ」

「貴方は此村でも、音に聞えた慈悲者と承る、拙僧も通り合せたが何かの縁、曲げて御赦免が願たう存ずる」

「いや／＼己あ、餓鬼の頃から、殺生が一番好だ、就中猿の肉は好物えよ、遣る事たあなんねえだ、そんなに欲しかあ、二兩出しなさろ」

拙者は見らるゝ通りの世捨人、蓄へとても御座らねば、今身に付けた二朱と二百、是我身に代る第一の寶、何卒不愆と思し召し、拙僧に御任せ下されい」

「不愆／＼じや世渡りや出来ねえだ、己ら此世でせえ樂をして、好物いものを食や、死てなんざ何になつても、少量も關はねえだよ」

「貴殿の様な慈悲深い御方は、必ず極樂に往生召さるゝてがな、若し二朱と二百で貰はれずば、此衣を差上げませう、何卒御聞き届け下され、猿を御許し下さる迄

は、假令十日が廿日なりとも、滅多に此所は去りませすま」

「馬鹿いはしやる、己が其麼破れ衣取て何になるものかな、夫れに十日も二十日も、飯を食はねえて居て見なせえ、おつ死んで仕舞ふぞ」

「他の爲に死ぬるは出家の本望、更に驚く處では御座らぬ」

「魂消た坊主な、此所で死んで見なさる、夫れこそ己あ引合に出されるぞ、まごまごすると打つ叩くぞ、」

「死ぬるを厭はぬ拙僧、打たるゝ位は易い事、いつそ打ち死して下さるか、左なくば此軒を拜借して、此處で往生致したう御座る」

「馬鹿め／＼、飛んでもねえ事吐かす、軒に首かゝりされて堪るか、仕方のねえ坊主、見込まれた不運だ、呉れてやんべえ、篤とゝ行ね」

「誠に有難い仕合せ、左らば連れて參りませう」

やつとの事に猿を太助、其まゝ山へ放して遣つた、其附近に宿泊して、土地の名所



舊跡を尋ね、二三日滞留し、今日しも野原の大木の下、捨石に腰を下して、流る、汗を拭ひ、涼を入れて居ると、いづく共なく一疋の猿、落の葉に山莓を包んで、一休の前に差置いて、頭をびよこく下げて居る、不思議に思つて見ると、先日太助た猿であつた、一休も猿の報恩に感じ、自分の袋に入れてあつた豆を、袋のまゝ猿に與へた、其翌日も又此木の下に涼んで居ると、先の袋に栗を、一杯に入れ、一休の前に差出し、同じく低頭して居る、是は去年の栗を、自分の栖に仕舞つて置たのであらう、

彼猿は、一休の滞在中は、宿屋へも、人の居らぬ時を見定めて、常に種々な菓實を持つて來たとか、一寸童話にでもあり想な話ではないか。

青天井を笠に被て

一休關東から歸る時、或大名の任國に歸るの、と同日であつた、頃は六月末つ方、

猛烈に來る太陽の光線は、金石も蕩す、はちと古い形容だが、足の裏もヂクヂク焼ける炎天、笠も被らず、大名の行列と、後になり先になり、終日行を共にした、是を遙かに見た大名、

『コリヤ、供の者共、あれに參る出家、笠もないと見ゆる、此炎暑に可愛想な者、誰ぞ參つて、笠一蓋を與へ遣はせ』

『畏まりました御座る、……あゝそこな御出家、我殿の仰せ、此暑中笠も被ぬは可愛想との思し召し、ちと古けれど有難く御受を致せ』

『是は、近頃有難き御仰せ、誠に忝なくは御座れど、拙僧は青天井を笠に被て御座れば、別に苦しうも存ぜず、何卒御主君へ宜しう、御返り事を願はしう存ずる、』

使ひも呆れた坊主だ、と思つたが、不用だと云ふ者を、無理に受取れとも云はれず、殿に此事復命すると、



『いや此僧只者ではあるまい、然らば不禮のない様、成可く日影を歩ませよ、若し行き違ふ時は、馬をよけて引かせよ、必ず粗忽致すでないぞ』

と家來の者に申し渡し、様子を見ながら行く處が、全く一調子變つて居る、そこで再び使者を以て、

『日も早西に傾いて御座る、御坊は御構ひなく、御隨意の處へ御宿を御定め下され』と云へば、一休は點頭いたのみ、さつさへ行つて、或宿へ泊つた、大名も本陣に泊ると、既に一休は此宿に泊つて居た、て使を以て、

『晝の程は失禮を申した、今晚同宿致したも何かの縁、是非一献差上げたう御座れば、御同道下されたい』

と申し入れたので、

『折角の御芳志、辭退致すも失禮、然らば參上致すである』

と破れ衣を引繕ひ、大名の座敷へ出て來ると、俄に大聲をあげて、

『如何に御坊、我國の習慣、他人に對面の節は、笠を脱いで參るが禮法、如何に出家なればとて、餘りに不禮であらう』

と咎めたが、其麼事に驚く一休ではない、

『仰せ迄もなく、脱て參り度は山々なれど、脱ても置くべき所の御座らねば、被たま、推參致して御座る、』

『いつの時か脱ぐ』

『死極つて』

『貴僧の死なば後は何と』

『弟子に讓る』

『弟子死ばな』

『其又弟子に』

『全く脱ぐは何時の時か』



『未來永々脱ぎ申さぬて御座る』  
 大名も何とも云ひ様がなく、是は聞ゆる一休に相違ない、と山海の珍味を出し、饗應致したとか。

芋はえぐいか

一休甲斐の國を通つた時、此土地でも人に知られた理屈屋、一休は頓智頓才、當代並ぶもの無いと云ふが、彼元來何程の者か、此道を通る時、突然に問ひ掛けて、彼の才を試みて呉れん、と待つて居た、然し大人では彼も用意するであらう、と一人の小供に、若し一休通らば、突然、『生恁麼の時如何、』と問ひ掛けよ、又和尚が何か答へば、「喝」と云へと教へたが、何を云ふにも小供の事、聞き馴れぬ事を教へられても、一向に判らぬ、夫れて某は、物によそへて教へた、

へた、

『生の字はナマと云ふ字で、恁麼は常に汝の好む芋を、インとはねた物を覚えよ』  
 と教へて置た、間もなく一休が來たので、

『夫れ早く行け』

と云はれ、直に駆け出して、一休の前に立つたが、肝盡の教はつた事は忘れて、芋だけが記憶にある、意急くまい、

『いもの時如何』

とやつたので、一休

『煮てもよし、焼てもよし』

と答ふれば、小供、「喝」とやる一休

『えぐいか』

と云ふたまい、さつさとして行つて仕舞ふ、蔭に聞て居た男、小供の間違も可笑いが、



一休の即答には少からず驚いて、矢張自分の敵ではない、と往生したさうな。

### 若い時は二度はない

如何に活佛と云はれ、大和尚と敬はれても、母の體から出た一休は、決して岩木でない、男女の色に心を奪はれん、とした事も度々であつた、嘗て一休駿河の國へ行脚の時、府中に小玉辨之助とて、田舎には稀に見る美少年があつた、

一休是を一目見てより、戀慕の情禁する能はず、頻りに口説いたが辨之助中々應ずる氣色もない、一休嘆息して、嗚呼儘ならぬは浮世かな、と一首の狂歌を、

花は根に鳥は古巢にかへれども

人は若きにかへるものかは

都のづくにう

### 小辨殿參る

と書て送られた、辨之助も一休の切なる心に感じ、こまぐと返事を書き送り、其夜一休の許に来て、

『御望みに随ひますれば、何卒御見捨下さるな、』と挨拶すれば、

『是れはよう參られた、然し今朝迄は戀しかつたが、今は其念も消え失せて御座る、先づ茶なと上つて、御歸り下され』

と、更に執心もない有様、辨之助も惘れて返す詞もない、一休の人妻を戀慕した時、と同一である、心の動く時には動かし、動かぬ時は動かさぬ、實に悟道の人である、と何れも感ぜぬはなかつたとか。

### たばかりの八橋

三河國八橋は、古代から杜若の名所、在原の業平も、かきつばたの五字を句の頭に

若い時は二度はない、たばかりの八橋



置いて、和歌を詠じた事がある、西行法師も此處へ来て、何とか詠じて行つたと聞き、我一首なかるべからずと、所の者に案内させ、来て見れば何の事、一面に稻を植た田で、杜若は一本も見えぬ、夫れて一首  
音にさく三河にかけし八橋も

だばかりありてかきつばもなし

馬じやげな

相摸國小田原に滞在中は、片岡彌太夫と云ふ浪人の家に泊つて居つた、何が扱當時天下に隠れなき一休、忽ち評判になり、大名の耳にも入つたので、大名は直に使者を以て、

「長の旅の御勞れ、嘸かしと存じ上候、誠に見苦しうは候へ共、御勞れを休め給はん程、此方へ御入り候へかし」

など書き送つたので、

「夫れは御苦勞、然らば御同道致さう」

と使者を連れて、大名の館へ參つた、大名も大に喜び、山海の珍味を出して饗應し、

「真に恐れ入るが、何か御手跡を戴きたい」

と申し入れた、……で一休、

「何れ宿へ歸つて、御届け申すであらう」

と其ま、彌太夫の家に歸つた、間もなく使者を以て、

「先刻御約束の御手跡、頂戴致したい、」

と来たが、一向氣も進まず、然も今御馳走して、交換的に、早速手跡の請求など、頗く思ふまゝ、側に有つた、彌太夫手習ひの反古を取つて、使者に持たせて歸した、大名は大に喜び、開て見れば手習ひの反古、然も彌太夫の手跡であるから、

「是は何ぞの誤りであらう、今一度行つて參れ」



と又使者を遣はした、一休愈々五月蠅くて堪らぬ、

『夫れては色々多く入つて居るが、此袋を參らする』

と一つの袋を與へた、中にはころ／＼する程入つて居る、使者も喜んで持ち歸り、

扱開て見ると驚いた、垢れてぼろ／＼になつた、古禪が入つて居た、大名も驚い

たが、強制的に書かせる理にも行かず、何れも大笑ひて終つた、

後陸奥地方を見物せん、と彌太夫の家を發足する、時に、柳と云ふ一字を、大きく

書て與へられた、又此家の古屏風に、牛か馬か判らぬ畫がある、彌太夫に聞くと、

『私の親の、幼少の頃から御座ります相な、然し馬か牛か判りませぬど、角のない

を見れば、馬かも知れませぬ、序に此畫にも一筆贊を願ひたら存じます』

と望めば、よし／＼とて直に筆を走らせ

馬じやげな

と贊をした、畫より一休の贊が有名で、其後西國の或大名が、高價を拂つて譲り受

け、寶物として珍藏して居るとか。

### 女は紅をうる

東海道赤坂の宿、と云へば古來宿場として、名高い處、膝栗毛でも御馴染の宿、此

赤坂に、齊と云ふ遊女があつた、東海道五十三次の内て、恐らく並ぶ者もない、と

云はれた美人、何れも其噂を聞いて我こそはの連中、齊の許に押し掛ける、有財の

色餓鬼は、一ヶ月二ヶ月の約束をして、更に他の客に逢はせぬ、爲に去年申し込ん

で、未だ逢はぬ、と云ふ者が多い、其全盛や兎ても形容の限でない、

美人薄命の諺に洩れず、萬人に惜まるゝいつきは、僅かに風の心地とて、臥して

旬日を出ず、此世を去つて仕舞つた、抱主は千萬の寶を捨てと惜み、戀慕せる若者

は、父母に別れたよりも悲しいと云ふ、

然し生死一度堺を異にすれば、呼べど答へず、語らう事も叶はぬ、何れも泣きの涙



て、葬送の準備をして居つた、折柄此宿に一休和尚滞在される、と云ふ者があつたので、女は五障三従とて、罪深いと聞く、ましてや浮き川竹の流れに沈む身は、人の恨も空恐ろしい、せめて一休様の様な活佛に、引導を渡して戴かば、彼も往生するであらう、と親しき者共の決議、早速一休に申し入れると、

『夫れは易い事、是へ持つて參れ、』

と自分の宿所で引導を渡して遣つた、其言に曰、

僧は衣を賣り、女は紅をうる、柳は緑花は紅、……喝。

其夜、いつきは傍輩の夢に、一休の引導で往生が出来、安養國へ生るゝ事が出来た、と非常に喜んで禮に來た、とか、夫れより二三日過ぎ、鎌倉へ行かうと、此宿を發足し、宿の外れ迄來ると、十數人の人が、何かわいゝ騒いで居る、見れば一人の老人が倒れ、既に絶息して居る、

此老人こそ此宿に住んで、往來の者に茶を販ぐ、茶屋の亭主である、然し妻なく子

なく、孤獨の身、今老人が氣絶した、と聞き、近所の誰彼駆け付け、醫者よ薬と手を盡したが、定業なれば夫れも叶はぬ、  
此人立の中に、一休を見知る者あつて、  
『幸是れに一休様が御座る、何と引導を願はうてはないか』  
と、一休に引導を頼む、

『夫れは易い事』

と老人が多年使ひ馴した、茶酌子を押つ取り、

一服一錢一期の間、末期の一句、雲客話……、喝。  
と遣つた、是れも往生が出来て、夢中に禮に來たとか申す。

佛法は胸にあり

一休常陸國鹿島の宮へ參詣せんと、杉の立木の繁みを分けて行くと、天狗丈け七尺



位の、山伏の姿にて、一休の面前に忽然と顯はれ、

『やれ待て坊主、佛法は如何に、』

『むねにあり』

『去らば割つて拜見な仕らう』

と氷の様な刀を引抜き、一休の胸を捕へて、今にも突立て様とした、時に一休、

春毎に咲くや吉野の山ざくら

木を割りて見よ花のあるかは

と詠じたので、天狗も一寸行き詰り、其まゝ姿を隠したとか。

### 法螺の吹き損こね

一休加賀國に滞在中、所々の信者に召かれ、毎に誰彼の家を廻つて居つた、其頃、時々顔を合せる武士に、いつも大法螺ばかり吹て居る男がある、一休も癢に觸る事

があつたと見え、中川彌太夫の家で一座し、酒食を終つた後、態と此男に話し掛け、

『御貴殿は中々の大酒大食、武士たる者は戦場に出るや、三日四日も食を喫る暇もない、とか承る、斯様な時の用意、豪傑は大酒大食を致すとか、誠に美しい御心かけて御座る』

元來法螺吹きの上に、充分に油を掛けられたから、堪つたものでない、鼻の天窓をヒク／＼させながら、

『いや和尚、是れ位は誠に小食で御座る、身共若い頃、同輩四五人と賭を致し、一斗の餅を残らず食たが、一向腹に堪へぬ、夫れて側にあつた栗餅を、五六十食べて、やつと腹が太りました、……て、早速食消化に、裏の川原へ飛び出し、七人乗の船を横に抱き、川の水を横止めて御座る』

『是れは驚き入つた御力量、誠に感服の外は御座らぬ、……拙僧の知る山伏にも、中々の大食が御座つた』



『ハテ、何程食ましたな』

『去れば、矢張賭を致して、二斗の餅を悉く平げ、未だ足らぬとて一斗を搗かせ、残らず食べ、餘り腹の膨れたれば、少し運動して參らう、と松原に飛び出し、三抱もありませうか、殊の外大きな松に雙手を掛け、根元から三尺位の處よりメリ／＼と折り、其根に腰を下して休んで居つた、處へ三尺位の小蛇、大きな蛙を呑んで、苦しげに腹這して參つたが、松の根形にある、黄な草花を舐ると、スルスル、と腹が細くなり申した、是を見た山伏、こりや面白い、我も舐つて遣らうと其花を嘗めたが運の極め、此黄な花は、生物を解かす薬で御座つた、餘り歸らぬに依て行つて見れば、三斗の餅と兜巾、篠懸など残つて、人間の形は消え失せて御座る』

と尤もらしい話、彼の武士聊か面喰ひ、是は法螺を茶にされたと思つたが、眞逆に喧嘩する理にも行かず、其日は不承々に歸り、以來決して一休には逢はず、又法螺も吹かなんだとか。

怪物退治

加賀の有田と云ふ村に滞在した時、此里に一つの古宮があつた、其庭の燈籠に、誰共なく毎夜來つて燈明を上げ、其圍を巡る大入道がある、近郷近在の者は、常に此沙汰、扱我出て退治せんと云ふ者もない、皆早くから戸を閉し、日暮れては一人も出る者はない、或者來つて一休に此不思議を語り、如何にかして、此怪物を退治したいと思ふが、其方便は何と致したものであらう、と尋ねた、時に一休、『夫れは誠に易い事、人迄もない、我等參つて退治て遣はさう』と引受けたので、村人も大喜び、扱其夜若者等大勢、宮の様子如何にと來て見れば、例の通り入道は巡つて居る、其内に二人になつて、ぐる／＼廻り初めた、



『扱は一休め欺し居るわい、一人ならず二人迄も、常に變らず廻つて居る、扱々出家など云ふものは、口程にもない腰抜け、無道者が多い』

と高笑ひして歸つて仕舞ひ、翌朝早速一休の宿所へ押し寄せ、

『扱も和尚は、自ら退治すると易請合して、昨夜の様は何て御座る、二人の入道が

夜明け迄、廻つて居つたては御座らぬか』

『いや其一人は拙者だ、夜一夜追つてく追ひつめ、明け方に退治致したれば、御

心配は無用、今晚から決して出る事でないぞ』

とは云ふたが、何れも誠とは思はず、猶疑つて、

『坊主甘い事を云ふが、其化物の死骸もなし、一向退治た様子もない、よう嘘を吐

く坊主ではあるわい、』

と笑つて歸つたが、夫れでも、と其夜宮に行つて見たが、更に燈明もなく、入道の

影もない、扱は誠に一休様が退治されたであらう、と村内の者共、名主を先に立て、

一同和尚へ詫に来て、以來天下の活佛と、何れも崇敬せぬはなかつたとか。

實は化物でも何でも無い、或僧が母の重病の爲め、毎夜參詣をして百日參りをして居つた、然も其夜は百日目、即ち満願の夜である、一休も其孝心に感じ、自分も共に百日參りをして遣つたのである、是が所謂、憶病の根性には、白鷺も白旗と見ゆるの類であらう。

### 長々しい豆の秀句

一休の輕口は、都は勿論、關東北國でも、誰知らぬ者ない程であつた、加賀に居た時も、所々に招かれ、輕口で人々を笑はせるので、藝人でも呼ぶ様な氣で、一休を呼んで輕口を聞く、處て此地の代官の奥方、殊の外一休が氣に入り、毎夜招いては面白い話に、腹の皮を繕て楽しんで居る、

今日は朝からの雨に、何れも陰氣な一日を送り、夜に入つては、又一休の輕口に、



臍の宿替をして、終日の鬱を散したが、老女の或者、

「一休様の御話は、誠に面白うは御座りますが、餘り短かいて便りない、もちつと長う、退屈する程話して下され」

と云へば、

「夫れは易い事、長くも短かくも、御望み次第に致しませう、」

「長いは眞に結構、是非に望みます」

と一同の詞に、一休一咳して、

「拙僧が去る方へ、夜話に參つた時、茶受けに炒豆を出されましたが、此豆只食るも面白くない、何とか秀句を云ふて、一粒宛取る事に致さう、と夫れから、さるまめ、……こまめ、……まめて暮す様に、など申して、何れも一粒宛取りました、其内に、餘り賢うも見えぬ男が、奥様の吉野詣じや、と申して、兩手で抄つて頬張る、ハテ面妖な、豆の秀句に吉野詣とは何の事じや、と尋ねますと、彼

の者、各々方は御存知ないか、井の内の蛙は大海を知らぬ、扱々氣の毒な事じや、あら／＼粗つと話しませう、御存知の通り、宅の奥様は、當春吉野詣を致しましたらう、其供は斯く云ふ拙者、行／＼名所舊跡の見物、棹の川原の石を拾ひ、井手の里では蛙の聲を聞き、玉水の里では砧を聞く、扱吉野へ參らば、櫻は今や花盛り、雪か霞か白雲か、蝶にまがうて散る有様、兎ても詞で盡されず、夫れより神社佛閣一も残らず拜禮し、小高き丘へ昇つて、四方の景色をながむる所へ、あら不思議や、一陣の嵐吹き來つて、奥様の塗笠を宙に吹き上げ、くる／＼廻してつツと谷の彼方へ落して行く、こは一大事と某、命を惜まず、幾何十丈の谷の底へ、岩に取り付き鳶に這ひ寄り、やつとの事で取つて參つたが、情なや笠の漆が脱落して居る、夫れから龍田法隆寺奈良長谷と各所を巡禮して、愈々京へ御歸りの節、御出迎へ致された、御親類の方々、皆美しう塗つた笠を召し、御對面あるに就て、先の笠を思ひ出され、塗師屋に聞合せると、銀三錢と申す、夫れは餘



り高い、一層手塗に致さうと、二疋の鳥目で漆を買はせられたが、母指の頭程しかない、然し奥様は何でも物を仰山に云はるゝ質、是は餘り少ない、豆程しかない、と仰せられたから、今豆の秀句に使ひました、何と珍しい秀句で御座りませう、と獨で威張て居りました、』

奥方を初め女中共、横を向て顔を脹らして居るもあり、退屈のまゝ居眠をする女もある、以來一休の夜話は聞かぬ事にされたとか。

### 地獄極樂の實現

一休甲斐に暫く滞在して、名所古跡を尋ね巡つた、此事里人の知る所となり、従つて地頭の耳にも入る、處が地頭も少しは禪を遣つた男、いつか巡り逢はゞ、唐突に問ひを起し、果して噂の如き活佛か否、自ら試験して呉れん、と時の到るを待つて居る、

或日地頭は、家來を伴ひ、領内を巡視の歸るさ、計らず一休を見て大喜び、唐突に『夫れなる法師、地獄極樂はいかに』

と問ひ掛けた、一休は眼を怒らし、

『糞をくらへ』

と罵倒して行き過ぎた、地頭、怒つたの何の、天窓の天邊から湯氣を立て、齒がみをして、

『夫れ者共、あれなる狼藉坊主、逃さぬ様、嚴重に繩をかけよ、』

主人の外に貴さを知らぬ奴共、手にく棒を振り上げ、打つ蹴る叩く、然も荒繩で高手小手に縛し、

『さりとて歩め、』

と尙も棒を振上げて、骨も碎けよと打叩く、時に一休、

『是こそ誠の地獄で御座る』



聞た地頭、馬より飛んで下り、

『是は誠に有難き御教化、左様の事とは露知らず、初めより段々の不禮、何卒御免下されませ、嘸御勞れも候はん、先づ此馬に御召し下され』  
と自分の馬を一休に與へ、自ら馬の口を執つて、我家に連れ歸り、山海の珍味を出して饗應し、

『暫くは御滞留あつて、此上とも御教示を蒙りたう御座る』

毎日御馳走を出し、外出する時は、夫れ籠よ、馬よと丁重に取扱ふ、時に一休、

『是れこそ誠の極樂だ』

と云へば地頭手を打ち、

『然らば此世の外に、地獄極樂は御座りませぬか、』

大に悟る處あり、全く活佛に相違ないと、以來は別殿に一休を移し、毎日拜禮して居たとか。

### 自畫自贊と遺言

友人の僧、曾て自畫を持て來て示した時、一休は口を極めて是を罵倒したが、矢張自己の像を自ら畫て、自贊迄も加へた、彼も俗界の人間たるを免れぬ、と評した人もあるが、彼の自畫と一休の自畫自贊とは、根本に於て異なる處がある様に思ふ、和尚の自畫は、椅子に腰を下し、丸竹の杖を手に、薄赤い衣を着て、然も長髪、眼は頓栗の如く丸く大きく、一風變つた姿である、夫れに

柳はみどり花は紅

行脚事畢

今日時節

折ニ主丈子

焼ニ六月雪

虚堂之再來天下老和尚一休宗純末期書レ之

と書て置た、又遺言狀の奥に

我死して百年過て、唐土より禪師來らば、我が再來と思へ、又二百年に當る年、



我屍わがしかばねを土つちより堀ほり出いして見みるべし、若もし形かたち朽くちたらば、云いひ置おきし語ごは火くわ申しんすべし、大おほ方かた死し骸がたはそこねまじ』  
 と書かてあた、其その百よ餘ねん年す過すぎて、隱いん元げん禪ぜん師じが來きたので、禪ぜん師じは一い休きゅうの再さい來らいであらう、と  
 の説せつが專せんであつたとか。

糞ふんを脮ひつて梵ぼん天てんに捧さいぐ

一休末期まつごの句くと云いふもの、中なか々く多おほい其その中うちに、

朦まろ々く而して三さん十じゅう年ねん、淡たん々く而して三さん十じゅう年ねん、朦まろ々く淡たん々く六じゅう十じゅう年ねん

脮ひつて糞ふん捧さいぐ梵ぼん天てん一いつ

又また同どう時じに

借用しやくよう申まう 昨けつ月げつ昨けつ日じつ返へん辨べん申まう 今こん月げつ今こん日じつ

かり置おきし五ごつの物ものを四よつかへし

本ほん來らい空くうにいまどもとづく

次つぎに

生しやう也や死し也や 死し也や生しやう也や、柳やなぎは緑みどり花はなは紅に、

喝げ

柳やなぎは不みどり緑ならず 花はな不はな紅ならず 御ご用よう心しんノ、

一いっ休きゅうと寒かん山さん

一休いっの世よに處しよするや、寒かん山さんによく似にた處ところがある、寒かん山さんは其その詩しに

我わが心こころ如ごとし寒かん月げつ 秋しゅう水すい清せい無む底てい

と吟ぎんじ、一休いっは歌うたに

我わが心こころそのまゝ佛ほとけいいき佛ほとけ

なみをはなれて水みづのあらばや

糞ふんを脮ひつて梵ぼん天てんに捧さいぐ、一休いっと寒かん山さん



と詠じた處は、寒山の詩の意と同一である、扱寒山は文殊菩薩の化身と云はれたが、一休は普賢菩薩の化身であらう、と時の人は云ふた、……然し一休に聞せたら、坊主頭に湯氣を立て怒つたてであらう。

狂詩

題鉢敲

晝不笠于夜不茵  
瓢箪扣罷有<sub>レ</sub>何益  
東西南北自由身  
花發十方淨土春

題影法師

元來有<sub>レ</sub>物不離<sub>レ</sub>身  
全體分明無<sub>レ</sub>面目  
揚<sub>レ</sub>手同揚<sub>レ</sub>手伸  
起居動靜似<sub>レ</sub>侮人

彼岸

今日彼岸欲<sub>レ</sub>開鉢  
無<sub>レ</sub>蓑無<sub>レ</sub>笠又無<sub>レ</sub>杖  
餘身貧乏雨晴稀  
結句食<sub>レ</sub>犬引<sub>レ</sub>腰歸

梅法

往昔江南沒落時  
欲<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>橫斜<sub>一</sub>踈影古  
起<sub>二</sub>青道心<sub>一</sub>成<sub>二</sub>法師<sub>一</sub>  
伊勢壺底暗皺<sub>レ</sub>眉

虱

獨臥寒衾患<sub>レ</sub>幾千  
夜深依<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>半虱<sub>一</sub>食  
余身貧極有<sub>レ</sub>誰憐  
天至<sub>二</sub>曉鐘<sub>一</sub>未<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>眠

寄少

紅顏綠髮冠<sub>二</sub>沙喝<sub>一</sub>  
若有<sub>二</sub>貧僧<sub>一</sub>憐<sub>レ</sub>慙<sub>レ</sub>志  
况忘<sub>二</sub>御年<sub>一</sub>十二三  
寮前吹<sub>レ</sub>味致<sub>二</sub>推<sub>レ</sub>參<sub>一</sub>

其

狂詩



少年十五月如日出  
木石無心多世上

一笑紅顏花似開  
嗚呼是此玉瑕哉

其

三

若衆天然好富貴  
無酒無茶又無餅

摺切爭可入御意  
山僧風流只文字

贊兒文珠

看畫忽忘七佛師  
手中經卷是何字

雲鬢霧鬢少年姿  
定有愁人小艷詩

贊阿彌陀佛

汝是桑願

一人不赦  
我無二願  
萬民不泄

贊大黑

大黑尊天其面黠

諸人信仰置棚陰

平生愛鼠是何事

足下米囊不用心

贊布袋

菩提煩惱

睡裏乾坤  
寤寐恒一  
佛無二虛言

青地扇切捨

本眞白物染青々

日本晴時如見星

又有縦茲思出事

宇治川畔亂飛螢

八島壇之浦合戰圖

射手名人能登守

兵法達者源九郎

秋風有恨八島浦

狼藉忠信亡菊王

一谷合戰圖

萬騎下山源氏兵

平家運盡出堅城

長江不洗英雄恨

日夜風濤戰鼓聲



源九郎流弓圖

澳々滄波已落弓

恰如三初月掛晴空

忽伸左臂取來者

天下英雄在彀中

熊谷招於敦盛圖

生年十六美男兒

身命碎珠回馬時

熊谷道心從此發

法然庵室念阿彌

佐々木四郎宇治川先陣圖

萬騎如雲宇水邊

東關諸將各爭先

功名誰出四郎上

一馬化龍何着鞭

於一

壽永三年三月天

九郎冠者乘兵船

源平合戰無二申計

海底死人幾千萬

題茶

有口不言全體圓

不離二色相一絶二諸緣

併吞大海江河水

吐出趙州一味禪

題黃

鳥亦說經似化他

樹頭樹底妙音多

林間花若諸菩薩

中有二黃鶯小釋迦

不動明王

全體眞黑稱明王

生付片輪目口張

一生不犯無念者

去何處固護摩堂

一谷

打落平家無數兵

九郎冠者大高名

敦盛熊谷進遲速

一朝懸向上二時聲



落髮時

東山々下玉毛頭  
今日出家作比丘  
移得天台眞羅漢  
平生所望一時休

題那須與一

與一源平第一弓  
判官召道射成功  
塞目祈念鞍馬上  
七花八裂扇眞中

題宇治川先陣

頼朝大將秘藏馬  
宇治川先陣給之  
生食前非磨墨後  
梶原源太一鞭遲

歲

有錢有酒有金銀  
今歲初成大徳人  
當寺他山若僧達  
未申案内往來頻

戀

日夜思君長不忘  
夜深戀慕臥空床

同

花咲花而易老花  
花顔花盛夢中花

同

花時花亦可情重  
花落花過誰問花

題性

生天成佛閣思君  
燈下吟詩瘦十分  
有力秋風不應拂  
胸關鎖斷楚山雲

靈

飯在中央盛二曲盆  
饅頭無味鐵崑崙  
慇懃三酒性靈水  
水出推流地獄門

狂詩



布

袋

布袋依（はていふくろによつてねむる）袋眠

人言是坐禪（ひといふこれざぜん）

工夫無（くふうのいちじせし）一字

大食腹便々（たいしょくはらべんべん）

狂

歌

はちす葉（は）の濁（にご）りにしまぬ露（つゆ）の身（み）は

唯其ま（ただその）の真如實相（しんによじつさう）

佛（ほとけ）とて外（ほか）に求（もと）むる心（こころ）こそ

迷（まよ）ひの中（なか）の迷（まよ）ひなりける

散（ち）れば咲（さ）け咲（さ）けば又（また）散（ち）る春（はる）ごとの

花（はな）のすがたは如來常住（にやらしじやうぢやう）

るらしつる神（かみ）のなみだのかはくまも

なき面（つら）かけに月（つき）ぞたちそふ

おのづから身（み）はいたづらになりにけり

心（こころ）をつねのすみかと思（おも）へば

かりの世（よ）にあだなる露（つゆ）の身（み）をもちて

千（ちとせ）年をいはふ人（ひと）のはかなさ

世（よ）のうさに代（か）へて住（す）みぬる柴（しば）の戸（と）に

問（と）はゞがほなる人（ひと）も恨（うら）めし

妙（たへ）なりし法（のり）の蓮（はちす）の花（はな）の身（み）は

幾（いくよ）世（よ）ふるとも色（いろ）はかはらじ

其（その）まゝに生（う）れながらの心（こころ）こそ

願（ねが）はずとても佛（ほとけ）なるべし

露（つゆ）ときえまぼろしと醒（さ）め稻妻（いなづま）の

かげの如（ごと）くに身（み）は思（おも）ふべし

狂歌



なげくなよ誠の道は其まゝに

ふたつともなく又みつもなし

らくらくと心にてこそ彼岸に

わたるも易き法の舟人

生死のことわり知らぬ坊さまは

犬の衣をきたるなるべし

奥山に結ばずとも柴のいほ

心がらにて世はいとふべし

國いづく里はいかにと人とはじ

本来無爲の物とこたへよ

焼き捨て灰になりなばなにか

残りて苦をばうけんとぞ思ふ

忘執の雲をはらさて終る身の

なりはてを見よ地獄なるらん

けぶりたつ野邊のあはれをいつまでか

よそに見なして身は残らなん

日々くに行末遠くなりけり

いつをかぎりの命なるらん

關守に我心をやかしぬらん

すぐなる道を行きかぬる身は

すみのぼる心の月の蔭はれて

くまなきものはもとの境界

はかなくも明日の命をたのむかな

昨日は過ぎし心ならずや

狂

歌



さとり得て心の暗のはれぬれば

慈悲もなさけも有明の月

三日月のみつればかけて跡もなし

とにかくにまた有明の月

春毎に咲ける櫻を見る毎に

なほはかなしと身こそ辛らけれ

待ち得ても程はなかりし郭公

ともをさそひていづち行くらん

年々に時雨の染むる紅葉ばを

四方のうつろうためしとも知れ

月は家心は主と見るときは

なほかりの世の住居なりけり

心をば墨の心に染めなして

身をば浮世の道にまかせん

寺を建て堂をたてたる功德より

唯常々の慈悲やましなん

しばし實に息の一筋通ふほど

野邊のかばねもよそに見えけり

色相は其時々にかはるとも

不生不滅のこゝろかはらじ

見るごとに皆其まゝの姿かな

柳はみどり花はくれなる



往生百首

阿彌陀佛あみだぶつさと呼ばよばば即すなはち去こ此し不遠ふをん

まよへば遙はるかの西にしにこそあれ

三國さんごくの法のりはしなく多おほけれど

釋迦しやかの教をへにまされるぞなき

儒釋道じゆしやくだうみ三つの教をへの別べつならず

善ぜんに善報ぜんほうあくにあくはう

昔むかしより智惠ちゑある人ひとの佛道ぶつだうは

二世安樂にせあんらくの教をへとぞ知る

三國さんごくの世々よよのかしこき君臣くんしんに

釋迦しやかの教をへをあふがぬはなし

三寶さんぼうに歸依きえする世々よよのためし見みよ

國土安穩こくどあんおん士民福樂しんふくらく

一心いっしんに誠まことの道みちに入る人ひとの

其行そのゆく末すえは子孫繁昌しんぼんじやう

公家武家くげぶけのぼだい信しんずる手本てほんには

鎌足かまたりおとど多田たじの満仲まんちゆう

道みちに入る末繁昌すえはんじやうのかゞみをば

藤とう氏源しげん氏しの家いへを見て知しれ

武士ぶしの遁世とんせい修行しゆぎやうの手本てほんには

西行法師さいぎやうほうしさては熊谷くまがへ

遁世とんせいは不遇ふぐうの人ひとはさもあらめ

名なとげて菩提ぼだいに入るはうどんげ



熊谷が遁世修行くどくみよ

をんしん平等自他の成佛

家にありて不忠不孝のともがらは

遁世修行ぞあやしかりける

親や主に忠や孝ある人々は

家にありても菩提たのもし

千丈は忠孝正しととんせいす

げにたぐひなき若き武士

世を遁れ修行の道は別になし

知者愚者共に座禪念佛

今も又十緇八素の友がなど

ろさんの昔思はれぞする

大唐の如滿禪師と樂天も

ともに念佛座禪とぞさく

四大五蘊皆空にして申すこそ

まことの念佛座禪ならまし

成佛は異國本朝もろともに

宗にはよらず心にぞよる

法は万法行もよろづの事なれば

こゝろづくに道をつとめよ

貴賤痴愚僧俗男女べつなれど

ぼだいの修行にわかちあらずな

佛説は菩提ねはんの眞理にて

二世安樂の教へなりけり



皆人の涅槃常樂知らずして

生死無常をなげくあはれさ

佛性は不生不滅のものなれど

まよへば生死流轉こそすれ

佛性を見るときは何を云ふなれば

不生不滅の道理知るなり

佛道をさとれと云ふは何事ぞ

因果菩提を會得するなり

智慧あるは若さも道をつとむるに

老て菩提を知らぬ愚さ

何事も前世の業と云ふ人の

ぼだいつとめぬ是ぞなほぐち

幸は願ふに來りわざはひは

つゝしむ門に入らぬとぞ聞く

善修しても惡事來るとうらむなよ

先世罪業即爲消滅

佛だに定業のがれ給はねば

早く因果の報うさいはひ

何事も定業なりと云ふ人も

まことの時に驚きぞする

よのつねに工夫觀念つとめなば

誠の時にこゝろ動かじ

人はたゞ平生志願なかりせば

修身齊家もいかゞあるべき



我等今悲願や祈誓するを見て

有爲の法とぞそしる佛陀耶

一切の諸佛菩薩も悲願より

ぼだい涅槃は成就し給ふ

一念の内より迷ひの雲おこり

永劫輪廻のやみぢとぞなる

儒釋道三つを流通とくく人の

何れの道にも入らぬ浅まし

皆人の因果ぼだいを知らずして

五逆の悪を作るあはれさ

今比丘の其身の罪は扱おきぬ

人の道心やぶるかなしさ

世の中に我ぞ悟ると自慢して

名利求むる人の多さよ

名と利とを求むるは扱苦患やな

人に使はれ財に使はる

財寶は身のあだなりと聞きながら

なほも蓄ふ心はかなさ

つらくと名利求むる人見れば

二世の苦患をつくりこそすれ

戒たもち座禪念佛たもちつゝ

慈悲ある人は佛ならまし

一念の慈悲眞實ぞたねとなる

九品の蓮華開けこそすれ



當來の三會の春の花もまた

現世の慈悲ぞ種とならまし

正法の花園山のくさや木を

昔の春となすよしもがな

今とても天地の道のかはらねば

末世の我等も菩提たのもし

釋迦もまた阿彌陀も本は人ぞかし

我等も形は人にあらずや

悪念は起り易くて慈悲心は

おこしがたきぞ物憂かりける

極樂も地獄も心にあるなれば

悪念おこらばやれと思へよ

人の非は知り易けれど我非をば

智者も知ることかたきとぞ聞く

道はたゞ世間世外のことゝもに

慈悲眞實の人に尋ねよ

我氣にはたとへ入らざる事なりと

人のいさめばやがて従へ

何事も人の心にさかうこそ

佛法世法のさわりなりけり

身を捨て鳥獸をすくひしは

釋迦の因地の修行とぞさく

煩惱を即菩提とあやまりて

罪を作れる人ぞいたはし



煩惱を即ち菩提となすことは

一念廻向のうちこそあれ

本來は無心無相の眞佛も

五俗にひかれ凡夫とぞなる

體ありて凡夫心になかりせば

本來空の無相眞佛

眞佛は有相無相にかゝはらず

四相なきこそ無相なりけれ

賣僧して物とり華麗する沙門

必ず地獄の數とこそなれ

華麗なる沙門を見てはみな人の

冥加者なりと云ふぞおかしき

今時の僧は中々俗よりは

因果菩提を知らぬ佛たら

戒たもち座禪念佛つとめては

心地悪きは造地獄業

物毎に執着せざる心こそ

無想無念の無住なりけれ

皆人の貪瞋愚痴の悪水は

三途の川の流れとはなる

六根に作る罪科のちりあくた

死出の山路の高嶺とぞなる

極樂の月待つ夜半の念佛は

雲きりはらふ秋の西風



老の身の月日を送る所作はたゞ

香華讀誦座禪念佛

口程に身の行ひのならざれば

我心にも恥られざる

教意をも祖意をもたとひ會せずとも

生死大事と思へ人々

皆人も諸佛の教へに任せなば

本來空に歸りこそせめ

生は寄なり死は又歸なりと云ふ事は

古き書典に多く見えたり

旅は只うさものなるに古里の

空に歸るをいとふはかなさ

障なく本來空にかへるこそ

即ち西方往生ぞかし

西方の本來空に往生し

無量壽佛となるぞめてたき

我禪は教への外の宗なるに

往生要歌よむぞおかしき

我宗にきらふべき法あらざれば

度生に何ぞ一句まもらん

摩耶は切利いたいけ夫人は極樂へ

これぞ佛のおほき説法

佛乘をせち辨僧の悪しき

世わたり道具とするぞ悲しき



不義にして集め蓄ふ財寶は

つもりて後は二世の身のあだ

名と利とを求むる心引かへて

誠つくさば二世は安樂

書寫寺の僕の衣のしらみとり

昔の御僧の今ぞこひしき

古の知識をきけば慈悲平等

今は何とて我慢慳貪

今時のさとるといへる人見れば

豁達空見さても佛陀耶

佛性も四大和合し體いでき

扱こそ五欲のちりを引きけれ

妙にして神通ものはこゝろかな

天地にわたりみぢんにも入る

心より四聖六凡出ぬるに

などて悪趣の業は作るぞ

何事も今日の觀樂過ぎぬれば

必ずあすは苦患とぞなる

現在の苦修善行ぞたねとなり

必ず來世は安樂の花

苦も樂も視在の事は一刹那

迷へば來世流轉ようどう

罪障の露しもふかさ身にはたゞ

座禪念佛惠日ならては



松島やみなとの海も極樂の

池水と同じ法のみちのく

十方は唯心の淨土と聞く時は

衆生もつとめば己身彌陀佛

一休逸話集終

大正三年三月廿五日印刷  
大正三年三月廿五日發行

(一休逸話集奥付)  
定價金七拾錢

著者 松尾 礫 天

發行者 立 平 衡

印刷者 小 泉 重 助



發行所

東京市神田區駿河臺袋町一番地  
振替口座東京二二三一三番  
電話本局二九九九番

光 融 館

東京市京橋區新富町三丁目二番地

(刷印社會式株刷印新日)







師 著 鳥地默雷	師 著 齊藤唯信	釋 雲照 律師 著	師 著 山田孝道	大内青巒 居士 著	師 著 鳥地默雷
觀無量壽經講義	無量壽經講義	十善業道經講義	佛遺教經講義	四十二章經講義	維摩經講義
一	一	一	一	一	一
郵 六〇	郵 八〇	郵 八〇	郵 四〇	郵 四〇	郵 六〇
六〇 四〇	七五〇 八〇	七五〇 八〇	三〇〇 四〇	二五〇 四〇	五〇〇 六〇
古來淨土門の信仰を説くもの藪ふて此經を講じた るもその眞價を發揮せるは善導大師也、本書は著 者が善導の流に依て懇切に講解せり	本經は阿彌陀如來成佛の因果と衆生往生の因果を 説けるもの、本講義はその形式に新生面を開きた れば現代的頭腦の人には最も適當也	此經は釋尊娑竭羅龍宮に於て龍王の爲めに佛教の 因果律を立脚地として説けるもの、一讀故雲照大 阿闍黎の德音に接するの感あるなり	釋尊一代の教化を終へ將に入滅に臨みて説きたる もの此經にして、人天衆の心得より大乘至極涅槃 常住の旨に及ぶ、佛教徒必讀の書也	本經は印度より支那に傳來せし最初の經典にして 又最初の翻譯なり、佛教の如何なる宗教なるやを 知らんとするものは先づ本書を讀め	本書は維什道生樂法師及び吾聖德太子の註疏等を 參酌して講解せられしもの、維摩入不二の法門は 本書を透して諸君面前に打開せらる

師 著 前田慧雲	師 遺著 原坦山	大内青巒 居士 著	師 著 大道長安	師 著 南條文雄	師 著 吉谷覺壽
那先比丘經講義	首楞嚴經講義	般若心經講義 佛說法滅盡經講義	觀音經講義	梵文阿彌陀經講義	阿彌陀經講義
一	二	合本 一	一	一	一
郵 六〇	郵 八〇	郵 四〇	郵 八〇	郵 六〇	郵 四〇
四五〇 六〇	七〇〇 八〇	二〇〇 四〇	七五〇 八〇	四八〇 六〇	三〇〇 四〇
パグトリヤの領主メナンデル大王が北方印度佛教 の後才那先比丘を宮中に請し佛教の要義を問答せ る者本書英漢兩譯を對照講説せり	學者として又時人として明治佛教界に著名なる坦 山師が最も得意とせる本經の講話を青巒居士の校 訂せるものにして第二卷迄既刊せり	心經の般若經六百卷の精髄なるは言ふまでもな し、法滅盡經は佛教が末世に至り滅盡せんとする 様を世尊自ら豫言し給へる寶典なり	法華普門品の一卷を所依經として妙力門救世教の 一宗を建立せる著者が蘊蓄を傾けて講ぜられたる ものにして亦實に師が最後の説法也	梵文の阿彌陀經を取り來つて丁寧に講解し本經の 眞價を發揮せられたるもの、漢譯と比較研究せば 少からざる興味を發見するを疑はず	淨土門の三經各其宣顯する所ありと雖も又自ら一 致する所あり、吉谷講師此邊の義を闡明するこゝ 頗る深遠、本書の眞價ある所以なり



天桂傳尊 禪師提唱	勝峰大徹 師著	釋宗演 師著	山田孝道 師著	若生形山 師著	若生形山 師著
碧巖錄講義	臨濟錄講義	無門關講義	菜根譚講義	寒山詩講義	禪關策進講義
軼人 三	一	軼人 一	二	一	一
郵 三、〇〇〇 一六〇	郵 八〇〇 八〇	郵 七五〇 八〇	郵 一、〇〇〇 一三〇	郵 五〇〇 八〇	郵 五〇〇 八〇
碧巖集は禪門第一の書、天桂和尚は洞上五百年間 出の善智識、見よ一周期中の諸祖師及雪竇圓悟が 師の舌頭に如何に活躍し來れるかを	故大徹老師が高座上に拄杖を振て大音獅子吼せら れしは禪界の一体觀なりき、臨濟宗意を知らんと せば先づ師の痛快なる提唱に接せよ	徳富蘇峰居士本書を評して曰く、宗演師の講義は 講義と云はんよりも寧ろ其題目を藉りて胸中の蘊 蓄を吐きたる者と、本書の價値可知	明代の高士洪自誠が佛道釋三教の精粹を陶冶して 處世の訣と悟道の要を示したるもの、著者が通俗 平易の講説は容易に之を了解せしむ	寒山詩三百十二首玄之又玄古來難解と稱す、本書 は白隱禪師の關提記聞に據りて丁寧之れを講解 し故事典故等一目瞭然たらしめたり	臨濟宗中興の祖白隱禪師も其雲水修養時代に本書 を愛讀して一生の指針とせるは人の能く知る所、 參禪者は必ず一本を座右にすべき也

釋雲照 律師著	村上專精 師著	織田得能 師著	高田道見 師著	齋藤唯信 師著	村上專精 師著
佛教通論	佛教大意	佛教人生論	佛教倫理大觀	大乘佛說論批判	佛教概論
一	一	一	一	一	一
郵 一、一〇〇 三	郵 八〇 一〇〇	郵 一、一〇〇 二〇	郵 一、一〇〇 二〇	郵 一、一〇〇 二〇	郵 五〇〇 八〇
本書は現代の思潮に鑑み、高尚幽玄なる佛教の原 理を簡明平易に通論せるもの、律師一代の蘊蓄は 箇中に傾注せられたりと云ふも可也	吾が佛教々理は之を歴史的に縱に研究を要すると 同時に又各宗教理其ものに就て研究するの必要あ り學者須く本論に就て其大綱を知れ	十三宗三十六派顯あり密あり自力あり他力あり其 歸着點を窮め難きは吾佛教也、本書は此要求に應 じて平易なる問答體を以て詳説せり	生と死、是れ實に人生の大問題也、本書は佛教の 原理を基礎として之れが説明を試みたる希世の快 文字、意義ある生活を望む者は來れ	浩瀚なる一切經中に散在せる倫理説を涉獵し之を 系統的組織的に批判詳説せられたるもの本書にし て、東洋倫理研究者必讀の名著なり	大乘佛說非佛說の論評は佛教學界に活波瀾を涌起 せり木著印度支那及日本諸家の之に關する見解を 叙し一々批判を加へ痛快に論斷せり



師 著 紹慶密應	有馬祐政 先生著	師 著 岩上行坡	師 著 山田孝道	師 著 織田得能	賢首大師 撰述
佛教哲學新論	日本哲學要論	眞宗綱要	佛教のよゝめ	和漢高僧傳	大乘起信論義記
一	一	一	一	和 三本	一
郵 二〇〇	郵 七〇〇	郵 四〇〇	郵 五〇〇	郵 六〇〇	郵 三〇〇
吾佛教の東洋哲學の精粹たるは云ふ迄もなし本書は第一篇に佛教認識論を述べ第二編に形而上學論を述べ佛教哲學研究者必讀の良書也	本書は古來日本に現出せる一切の思想を哲學的に研究し泰西諸哲學と比較評論せる者吾邦思想界の將來を知らんとする者は一讀を要す	本書は淨土眞宗の教史より教理に亘り凡そ一宗の要義大綱は細大漏さず悉く之を網羅して通俗平易の説何人にも容易に安心を得せしむ	本書は著者が東西古今の教理學說事實を引き來り懇切平易に佛教を説きすめられたるもの新式の説教演説を試むる人にも好參考書也	本書は日本支那の各宗高僧の傳記を漢文にて綴りたるものにして一部の列傳體佛教史と云ふべく各宗中學林の教科書として最も適當也	佛教學者必須の寶典たる本書に嚴に校訂を施し縮刷したるもの、印刷鮮明價亦た甚だ廉各宗學校等の教科用として最も適當なるを信す

師 著 山田孝道	師 著 山田孝道	大内齊辯 釋宗演	師 著 山田孝道	師 著 山田孝道	高田道見 著
瀧山警策講義	學道用心集講義	碧巖錄十則講義 寶鏡三昧講義	普勸坐禪儀講義 坐禪用心記講義	證道歌講義	正法眼藏辨道話講義
一	一	合本 一	合本 一	一	一
郵 三〇〇	郵 三五〇	郵 五〇〇	郵 二〇〇	郵 一六〇	郵 五〇〇
本書は大瀧山禪師の著晝夜十二時養器を抱へ本來具有の面目を知らず俗界利名の巷に走る似而非道者の尻べたを笞打たれる警策の鞭也	道元禪師遺文中の精粹にして學佛道者の爲めに用心を示されたるもの、斯道に志すの士は本講義に依り師が老婆鐵棍の慈悲を信受せよ	碧巖錄に古德尊宿の活作略を窺ふべく、寶鏡三昧に禪法深遠の哲理を見るべし、其他十支談語仰要路等有益なる禪書の講義を附載せり	坐禪儀は道元禪師の著、用心記は瑩山禪師の著、共に坐禪の儀式作法心得等を説けるもの、初學者は先づ兩書に依て其要旨を實究せよ	證道歌は唐の永嘉大師が悟道の長詩にして語簡に意深く押韻自在聲調流暢禪門千古の絕唱也、參禪の暇試に之を賦誦すれば悠然神遠矣	道元禪師の正法眼藏中より辨道話一篇を抽出して之を講解せるもの、題目に依らず念佛に依らず坐禪を以て一方究盡を志すものは讀め



若生國榮 師著	織田得能 師著	島地大等 師著	前田慧雲 博士著	姫路大圓 釋清潭	大内青巒 居士著
父母恩重經講義	天台四教儀講義	十不二門論講義	天台西谷名目講義	菩提心論講義 大乘止觀頌講義	原人論講義
一	一	一	一	合本 一	一
郵 一〇〇	郵 五〇〇	郵 六五〇	郵 四〇〇	郵 一六〇	郵 三五〇
泰西物質主義の影響を受け吾邦固有の道德たる忠孝の美風が日に廢頹しつゝあるに際し本經を流布するは時弊を濟ふに大功あるべき也	高麗の沙門諦觀師四教の要義を簡約して本書を著す、天台の學者古來以て津梁させり荆溪の流を汲まんとする者は先づ本講義より入れ	本書は第一編支那本朝の天台教史及本論研究の歴史を述べ第二編天台教義の要領を説き第三編に於て各章本文分科解釋の三段に分てり	本書は天台宗圓教に用ふる所の術語を解釋せるものにして之を繙かば同時に天台圓教の教理にも通曉するを得べし、講説亦親切を極む	菩提心論は八宗の祖師龍樹菩薩の著、眞言密教の菩提心を論じたるもの、大乘止觀頌は南岳慧思大師の著、觀心止觀の要義を述べたり	唐の宗密禪師破邪顯正の論法を以て先づ儒道二教を破し小乘教と權大乘を斥け實大乘華嚴の宗義を顯はしたるもの一部の佛教哲學書也

織田得能 師著	龜谷天尊 先生著	藤谷還由 師著	齋藤唯信 師著	織田得能 師著	村上專精 池原雅壽
大乘起信論義記講義	金獅子章講義	華嚴學講義	俱舍宗大意 三十唯識論講義	七十五法名目講義	因明學大意 因明三十三過本講義
一	一	一	合本 一	一	合本 一
郵 一、三〇〇	郵 二五〇	郵 一五〇	郵 六〇〇	郵 六〇〇	郵 二六〇
大乘起信論は馬鳴論士の著、義記は唐の賢首大師の註釋せるもの、本書古來末疏等頗る多し、著者其要を平易に講解し、六百頁中に收む	賢首大師則天武后の召に應じ長生殿に於て華嚴宗意を講説し面前の金獅子を捉へて噓さし法界緣起の妙理を發揮せる甚深微妙の大文字	本書は華嚴經の要義を探り華嚴一宗の宗意を闡顯し事々無礙法界の支理を説きたるもの、著者多年華嚴學專攻の餘に成りたる快著なり	俱舍と唯識とは佛教々理の基礎にして又印度哲學の重要なるもの也、學者先づ本書に依りて其大意を了得し然る後その蘊奥を極むべし	俱舍哲學の組織内容に通曉せんを欲せば先づ其名目術語に熟するを捷徑となす、本書は即ち其主なる名目七十五語を取り詳解を下せり	因明學は佛教哲學中の論理學にして此因明の論理學上立量に就て不正なるもの三十三過あり、斯學に精通せる博士が講説せる者本書即是



道重信教 師著	淨土往生論講義	一冊	四〇〇 六〇	西方淨土の思想は馬鳴龍樹等の論師に依て唱出されたれ共天親菩薩の本論の如く組織的に説かれたるはなし本書能く其主旨を發揮せり
香月院 深勳講者	教行信證講義	一冊 帙入	一〇〇〇 三〇〇	香月院上人曾て教行信證を講ず不書是なり、唯證の一巻を缺けるを以て今皆往院頼慧師の講義を以て之を補ふ眞宗學者必須の寶典なり
皆往院 頼慧師著	教行信證眞佛土化身講義	一冊	六、五〇 二〇〇	本書は前の教行信證講義と合せ眞宗御本書の講義全く茲に完結す眞に希有の珍籍也、眞宗僧俗此に依て開祖聖人微妙の法義を頂戴せよ
前田慧雲 博士著	正信偈講義	一冊	一七〇 四〇	淨土眞宗の開祖親鸞聖人が正しき信仰を勤めむが爲めに述べ玉へる偈頌にして、博士の講義は繁簡其中を得能く開祖の眞意を發揮せり
近角常觀 師著	歎異鈔講義	一冊	六五〇 六〇	此書は親鸞上人が熱烈なる信仰を告白せるものにして、近角學士は又當代に於て熱烈なる信仰者として知らる、本書内容の充實可知矣
伊藤哲英 師著	改悔文講話	一冊	一六〇 二〇	本書は淨土眞宗の中興靈如上人の撰述にして文字僅に二百字内外に過ぎず而も眞宗の安心法門は悉く此中に攝め盡して漏すまゝなるなし

釋慶淳 師著	即身成佛講義	一冊	五五〇 六〇	眞言秘密の深旨を究めんと欲せば先づ即身成佛の義に通ぜん事を要す、一切差別の迷見は之に依て破却するを得べし、本書之を詳述す
織田得能 師著	八宗綱要講義	一冊	一、一〇〇 二二〇	南都東大寺凝然大徳の著、俱舍、成實、律、法相、三論、天台、華嚴、眞言八宗教義の綱要を説けり、織田師の講義又頗る明晰を極む
齊藤唯信 師著	三經の大綱	一冊	二五〇 四〇	淨土教の三部經即ち無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の大綱要領を達意的に叙せるものにして其脉絡系統關係を説示し些の遺憾なき也
齊藤唯信 師著	七祖の大綱	二冊	四五〇 六〇	淨土教の七祖即ち印度の龍樹、天親、支那の曇鸞、道綽、善導、日本の源信、法然が法説を對照比較して、教理發達の跡を明かにせり
貞嶺禪師 撰著	達磨經說通考疏	和一本	五、〇〇〇 一六〇	學徳雙絶を以て白隱會下に鳴れる東嶺和尚が異説多き本經を註釋せるもの考經頗る該博經義を剖拆して餘蘊なし、美濃判五百枚の大著



禪書の部

著者	書名	冊数	定価	郵税	内容
山田孝道 師編	校補禪門法語集	一	一、七〇〇	郵 二〇〇	本書は古來吾邦禪門の宗匠碩徳が假名書の法語道話類合計三十部三十三冊を蒐録せり、禪學に志すものは先づ之に依て入るを捷徑とす
森大狂 居士編	校補續禪門法語集	一	二、五〇〇	郵 二二〇	本書輯むる所合計三十一部四十一冊前編と合せて假名法語類の精粹を網羅せり、平易通俗の文字禪宗の妙理を發揮す學者必須の寶典也
次目	光明藏三昧不動智神妙錄 大智三問答 二、三、月、舟、夜、參想話語 一、山、泥、水、集、語	三、依、增、鏡、語 二、時、法、語 一、法、語	一、御代の腹鼓 聖一國師法語 大應國師法語 明峰禪師法語 寶山禪師法語	二、各三五〇 各三〇〇	施、枯、大、反、快、蛇、馬、古、集、語 行、本、禪、師、法、語 歌、集、語
山田孝道 師編	禪林叢書	二	各三五〇	郵 六〇	本叢書第一編は東坡禪喜集及び澤庵和尚垂示正眼國師眼目の三種、第二編は居士分燈錄及び道元禪師和歌集法燈國師法語の三種を収む
次目	白隠ちまぼくれ 大智禪師法語抄 水鏡目なし用心抄 大燈國師法語 猿水禪師法語	一、御代の腹鼓 聖一國師法語 大應國師法語 明峰禪師法語 寶山禪師法語	一、各三五〇 各三〇〇	一、御代の腹鼓 聖一國師法語 大應國師法語 明峰禪師法語 寶山禪師法語	

著者	書名	冊数	定価	郵税	内容
山田孝道 師編	禪曹洞聖典	一	一、〇〇〇	郵 各八〇	曹洞宗に於て日常看誦する經咒偈文三十二種列祖の訓誡十五種回向宣疏葬法念誦等凡そ本宗必須の寶典は悉く網羅せり製本頗る美
鈴木子順 師編	禪臨濟聖典	一	七〇〇	郵 八〇	本書は曹洞聖典と同型にして臨濟一宗の聖典を悉く収録せり教誨師布教師は勿論本宗一般僧侶檀信徒は必ず一本を座右にせざる可らず
忽滑谷快 天師著	禪家龜鑑講話	一	七〇〇	郵 八〇	朝鮮國一代の禪匠葆真大師の撰、經典祖録五十餘種中より學者の指針とすべき語句を輯録附註せる者、著者獨特の講話は趣味津津たり
禪道會 編纂	禪林文庫	寸珍	各三五〇	郵 四〇	第一編は白隠禪師著夜船閑話さしも舛白隠法語及正宗國師年譜の四本第二篇は澤庵禪師の東海夜話を収む、寸珍美本奇書珍籍續々刊行
青龍道人 著作	雲水物語	一	五〇〇	郵 八〇	著者は天龍巖山下の逸足、本書は著者が半生雲水行脚時代の夢の跡を面白ろお可笑く綴りたる者、挿畫亦頗る輕妙、天下一品の快書也
白隠和尚 戲著	寐惚の眼覺	一	六〇〇	郵 二〇	正宗國師の白隠が天下の衆生のいつも寐惚け顔せるを憐れむの餘書き綴りたる眼ざまし草滑稽洒落の筆致能く達磨宗の的意を發揮せり



各宗用書の部

著者	書名	冊数	定税	内	容
鷲尾順敬 先生著	日本佛家人名辭書	一	郵九〇〇 郵二八〇	一	吾邦佛教渡來後各宗の高僧碩徳は勿論苟くも一能一藝を以て知られたる佛教六千餘人の傳記を網羅せる明治佛教界不朽の大著は本書是
松尾茂 先生編	道歌大觀	一	郵二〇〇〇 郵一六〇	一	本書輯むる所の道歌無慮壹萬數千首例題に依て分類し二句索引を附し簡易に卷中を索るに便せり國學者宗教家教育家座右不可缺の寶典
織田得能 師著	佛語解釋	一	郵一五〇〇 郵二〇〇	一	竹取物語枕詞紙榮花物語大鏡水鏡增鏡方丈記十訓抄徒然神皇正統記古今集拾遺集の國文十二種中の佛語を解釋し其出典を詳かにせり
織田得能 師著	佛教金言集	一	郵三五〇 郵六〇	一	佛典諸經論中より倫理、信仰及び哲學に關する聖語を蒐集して一語毎に通解を施し總振假名を附したれば好箇の修養資料たるや疑なし

大目  
日本佛教沿革略  
諸門跡歴代  
異名異稱索引  
人名首字字畫索引  
歷代天皇皇后皇子授戒表  
奈良平安朝時代佛家位階官職表  
禪僧別號室名索引  
人名首字字畫索引

日本佛家年表  
諸大寺歴代並諸職次第  
名數索引  
本文(六千餘人傳記)  
日本佛教各宗系統圖  
勅號勅諭索引  
宗派分類索引  
肖像木版寫眞版數百葉

森大狂 居士編	一休和尚全集	一	郵五〇〇 郵八〇	一	五山傑出の高僧一代の風流洒落兒たる狂雲子一休が遊戯七十餘年間に著作せる隨筆、小説、物語、談曲、偈頌和歌等は收めて本書に在り
禪學編 輯局編	白隱和尚全集	一	郵五〇〇 郵八〇	一	吾國に過きたるものが二つあり駿河の不二に原の白隱と謠はれたる臨濟中興の名匠正宗國師一代の假名法語を收む、參禪者必讀の寶典
原僧運 郡若	禪學早わかり	一	郵四九〇 郵六〇	一	一代の偉僧として又時人として明治佛教界に傑出せる坦山和尚の全集也、收むる所悉柄同源論鬚奇異體論心性實驗錄演說語詩文逸話
釋宗演 師著	一字不説	一	郵五〇〇 郵六〇	一	本書は著者が洒々落落風味三昧に遊戯せらるる手すさびに高尚幽玄なる禪理を爐邊の茶話に寓して通俗平易に述べられたる面白き書也
勝峰大徹 師述	禪と長壽法	一	郵五〇〇 郵六〇	一	禪界の泰斗釋宗演老師が辯才に秀でらるゝは世の能く知る所、本書は師が諸處の請に應じ廣長舌を揮て講演せられたる者十四篇を録せり
					本書は故大徹老師が自己の經驗と古來禪門に傳はれる精神的修養法を基礎として長壽法を述たり長生して大に活動せんとする者は讀め



釋悟庵 師著	足立栗園 先生著	接梧實嶽 師著	若生國榮 師著	山田孝道 師著	後藤北溟 師著
禪と武士道	偉人參禪錄	評釋 靜坐のすゝめ	活禪談	殺活自在	修養禪話
一	一	一	寸 三珍	寸 一珍	寸 一珍
郵 六〇	郵 六〇	郵 二〇〇	郵 各二五〇	郵 二五〇	郵 二五〇
四〇〇	六〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
禪と武士道の大意、禪と武士道の處世觀、歴史上の禪と武士道、禪宗教理と武士道、禪僧と古英雄偉人の臨終等を説く、一讀趣味津津々	全編を上流悟道錄、武士參禪錄、三教一致錄の三に分つ、古來歴史上の偉人傑士が如何に其平生を修養せしか、是本書の詳に説く所也	宗演光師が現代的の頭腦を以て禪の妙理を發揮し靜坐修養の効を説かれたる「靜坐のすゝめ」の一篇を師が丁寧に評釋布演したる快著也	本書は師一流の廣長舌を以て修禪の方法を面白く説き、古徳名匠の參禪敲唱せる事蹟を示し、縦横無礙に禪の妙用を説破したるもの也	本書説く所、禪、儒、道東西の文學技藝に涉り、近代の高僧偉人烈婦劍客俳優の事蹟等を探り來つて參禪學道の要訣を示したるもの也	本書は古今の禪者か説きたる參禪の要訣、及び古人の言行逸話等を輯録して修養の方法を説明せり文辭平易にして流暢學禪の好伴侶也

釋雲照 律師著	釋雲照 律師譯	釋雲照 律師譯	釋雲照 律師譯	釋雲照 律師譯	白隱禪 師著
日本國民教育の本義	原人論	十善業道經	佛遺教經	延命觀音經靈驗記	
一	一	一	一	一	和本 二
郵 三五〇	郵 二〇〇	郵 二〇〇	郵 二〇〇	郵 二〇〇	郵 五〇〇
四〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	六〇〇
本書は著者が宗教家としての立場より歷朝聖王の遺訓に基き吾國民性の精神を發揮し以て現下の教育の本義を指導せられたる快著なり	紙數僅少にして而かも佛教哲理を概括せる本書が各地講習會等の講本として需要日に盛なるを以て一般人士の便を圖り訓譯せし者なり	本書は十善業道經を訓譯して何人にも讀易からしめたるものなり、卷頭に釋尊の密書を挿入し且つ讀經に就ての作法を誨示せられたり	本書は佛遺教經を訓譯して何人にも讀易からしめたるものなり、卷頭に釋尊の密書を挿入し且つ讀經に就ての作法を誨示せられたり	本書は佛遺教經を訓譯して何人にも讀易からしめたるものなり、卷頭に釋尊の密書を挿入し且つ讀經に就ての作法を誨示せられたり	正宗國師常に其徒をして此經を念誦信受せしめ自ら漢土及本朝に於て此經の靈驗ありし事蹟を蒐録せられし者學者輕易の觀を爲す勿れ

雜書の部

著者 冊數 定價 郵稅 內容



350  
2251

元良勇次 郎先生著	山岡鐵舟 先生口述	榊東正彦 先生編	安部正人 先生編	田尻稻次 郎先生著	田尻稻次 郎先生著
教育と宗教との關係	武士道	海舟言行録	鐵舟言行録	新體琵琶歌	新曲琵琶 溫折錄
一	一	一	一	二	一
郵	郵	郵	郵	郵	郵
一五〇 四〇	三五〇 六〇	六〇〇 八〇	六五〇 八〇	二七〇 四〇	三〇〇 四〇
本書は倫理哲學に精通せる博士が世の學者が教育と宗教との關係に對する謬論僻説を破して其本義を闡明せしもの宗教家教育家は續め	幕末の奇傑山岡鐵舟翁が武士道の眞意を親しく口述せられたるを勝海舟翁の之に評論を下したる快書にして兩偉人の面目は箇中に躍如	幕府末造の難局に當り悠々として天下の大事を決し維新の鴻業を翼贊せる海舟翁の面目は本書所録の翁の記録講話逸事詩文に依て可知	禪を以て經とし劍を以て緯とし忠君愛國の本領を發揮せる鐵舟老居士の面影は此言行録を透して窺ふべし海舟先生の評語錦上花を添ふ	本書は田尻博士が國民の志氣を鼓舞せんが爲自ら作曲せられたるもの若夫試みに絃上に上さんが半月の妙音は梁上の塵を舞すの妙あらん	博士の新曲は曾て賢處に於て四絃半月に和したる光榮あるもの勉學の暇吟誦一番せば剛健の志操を養ふの資として之に過ぐるなからん



8.5. 8

38



350

225



終

